

東京発掘プロジェクト 水辺編Ⅴ

INDEX

「東京発掘プロジェクト」とは？

皆川 典久(東京スリパチ学会会長)

01. 舟運美術館	22U1116	郷森 駿
	22U1127	鈴木 秀太郎
	22U1146	乗安 栞大
	22U1157	水越 海太
02. 目黒川舟入場をまちの発着点に	22U1102	池田 のどか
	22U1161	八代 加伊
03. 河岸の更新 - 時代を刻む日本橋川 -	22U1135	嶋 優衣
	22U1139	中釜 英里香
04. 都市の流速	22U1148	早川 将右
	22U1142	長野 文哉
	22U1129	関川 竜宇司
05. かざぐるまの道	21U1304	上平田 志郎
06. 東京の水辺に 賑わいを - 御茶ノ水・水道橋 -	21U1303	雀 達
	21U1302	王 雨晨
	22U1124	朱 澤元
07. 亀島川の湊再編 - 「抜け」がつなぐ水辺空間 -	22U1138	照沼 和佳奈
	22U1141	永長 真結

東京発掘プロジェクトとは？

東京の足元にはたくさんの水路や川が埋もれている。
それらをリアルに「発掘」して歴史的景観を現代都市空間に組み込み、
かつて「水の都」とも呼ばれた東京の未来像を構想するプロジェクトである。
東京の都市域は、武蔵野台地（山の手）と呼ばれる洪積台地と
荒川・隅田川の三角州からなる下町低地（沖積平野）にまたがって広がる。

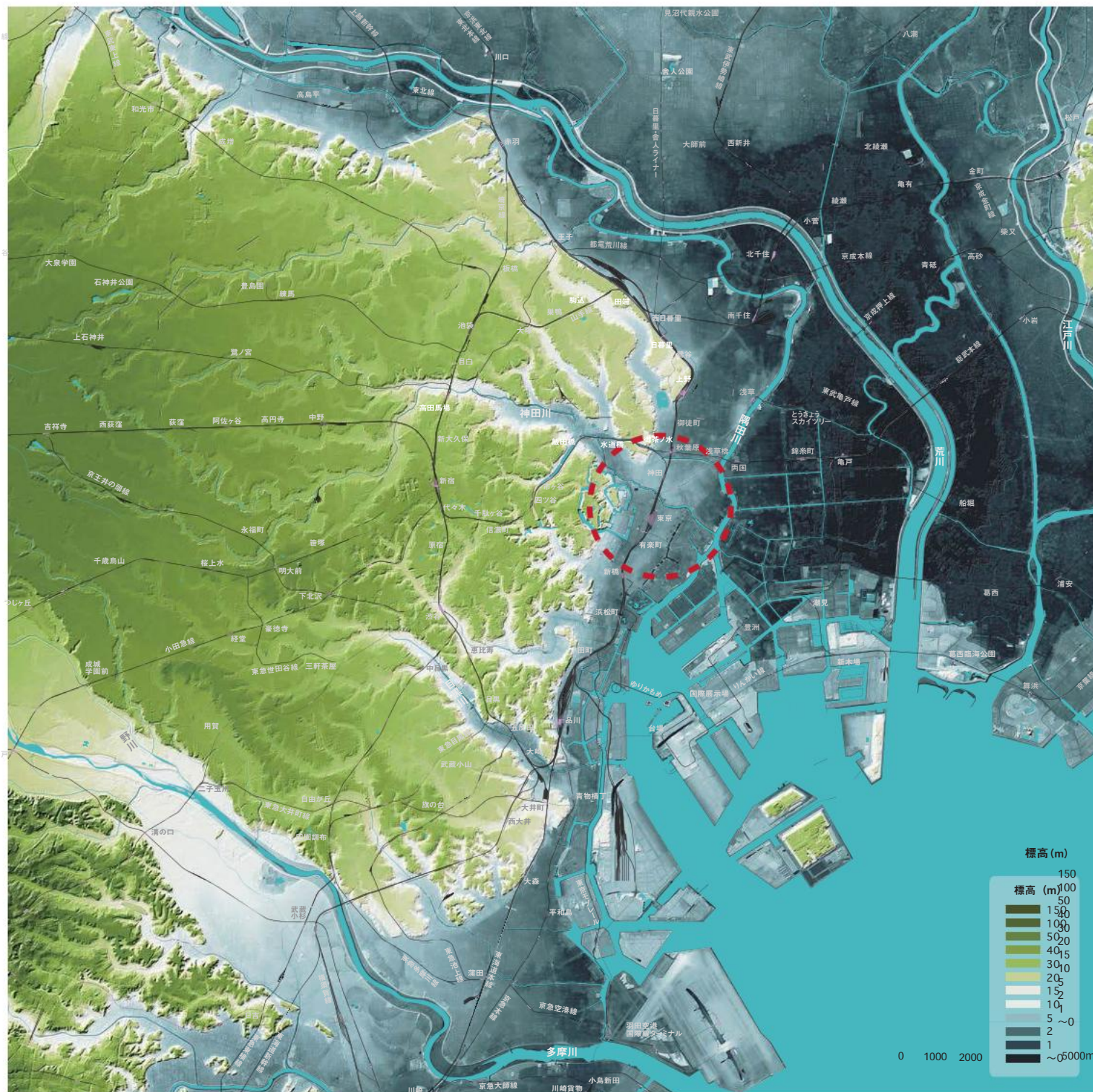
山の手には、台地から発する都市河川が無数に流れていたが、
それらの多くは高度成長期（1960 年代）に蓋をされ暗渠化されている。
また、台地の尾根筋には用水路が設けられ、水利に乏しい土地を
江戸期以来潤してきたが、それらは廃止され、流路跡が都市に刻印されている。
かつては尾根筋の水路と谷筋の自然河川が結ばれ、
台地には壮大な水のネットワークが築かれ、世界最大の都市（江戸）を支えていた。

一方、下町低地には江戸期以来、無数の水路や運河がはりめぐらされ、
水を介した舟運による壮大なネットワークが形成されていた。
ベネチアのような「水の都」の様相を呈していたが、
それらの多くが震災復興や戦災復興の際、瓦礫処理のために埋め建てられた。
撤去されずに自分たちの足元に「歴史的遺構」が眠っているわけだ。

「循環型社会」への転換を模索する上で、土地の特性を読み解き、
循環する水のポテンシャルを活用することは、
未来に向けた都市像を構想する手がかりになるとも考えている。
地形や水に着目することは、歴史の再評価にとどまらず、未来志向の試みだ。

「水の都」とも称された東京は、未来に向けていかにあるべきか？
現状分析から課題を抽出し、既成概念に捕らわれることなく
自由な発想・突き抜けた構想力で自分たちの「夢」を描いてほしい。

2023 年 3 月
東京スリバチ学会
皆川 典久

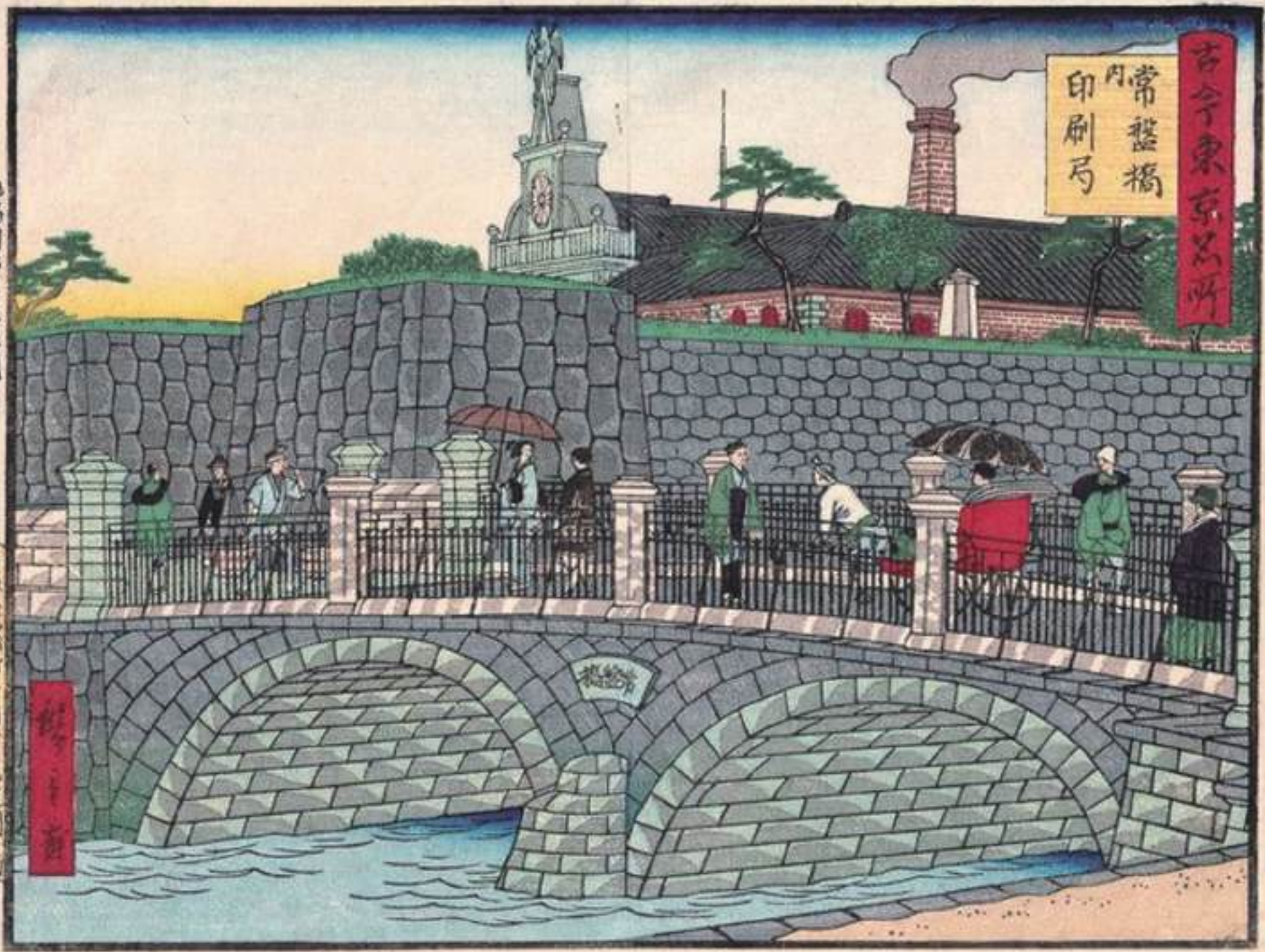


舟運美術館

東京発掘プロジェクト 2022

古今東京名所

常盤橋
印刷局



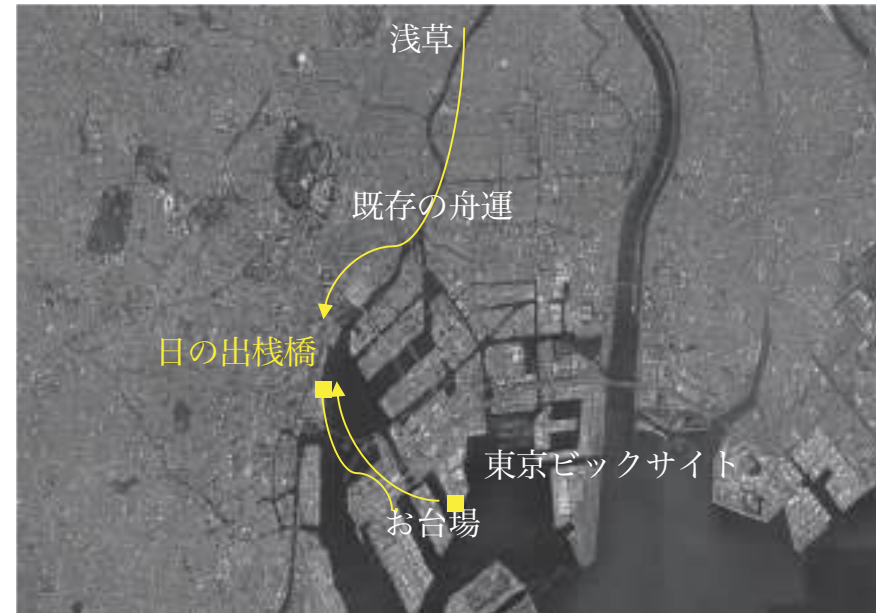
明治十七年二月

出版人 横山町三丁目 芳村 徳次郎

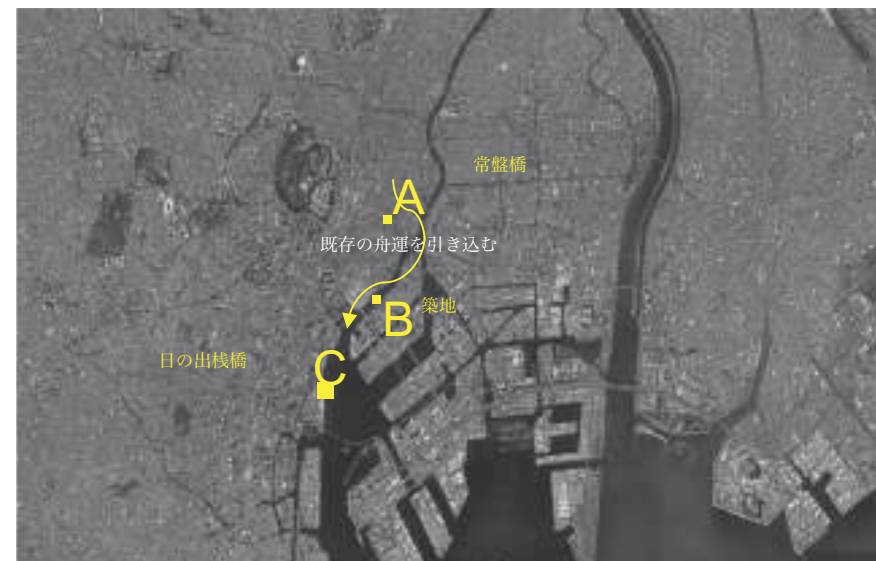
BACKGROUND



常盤橋の「橋」の歴史は、江戸開府よりも100年以上前、最初に江戸城を築いた太田道灌（1432-86年）の時代にまで遡ります



東日本大震災で大きな被害を受け、長い間、修復工事を行っていた常磐橋が本来の姿を取り戻しました。八角形の大理石の親柱と、唐草意匠の手すり柵。そして路面には当時いち早く取り入れられた「歩車分離」（人は端、馬車と人力車は中央）が再現されている。



常磐橋、築地、日の出棧橋を美術館として見て回る新たな船のあり方

1

SITE

PROBLEM

PROPOSAL

DESIGN

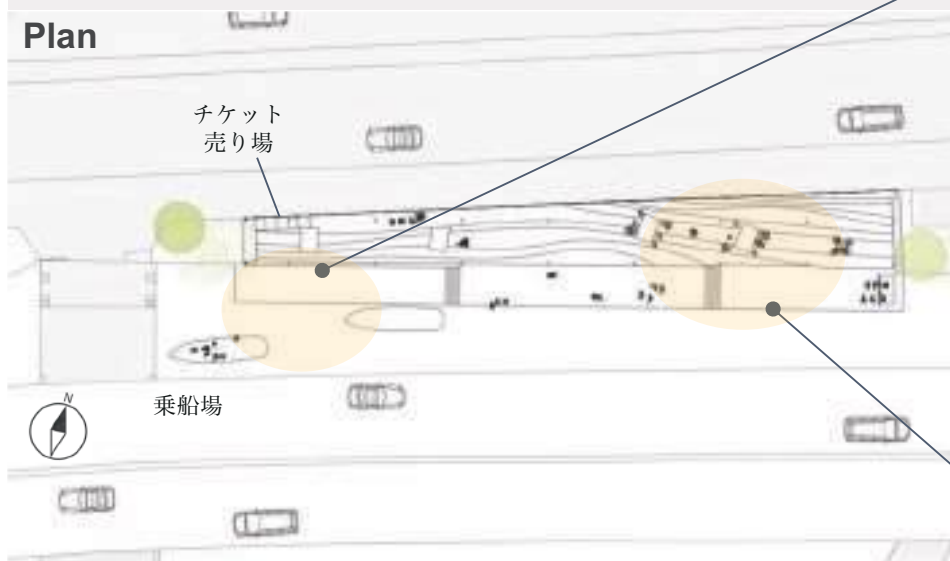
VISION

SITEA:常磐橋

Site



Plan



Perspective



SITE

PROBLEM

PROPOSAL

DESIGN

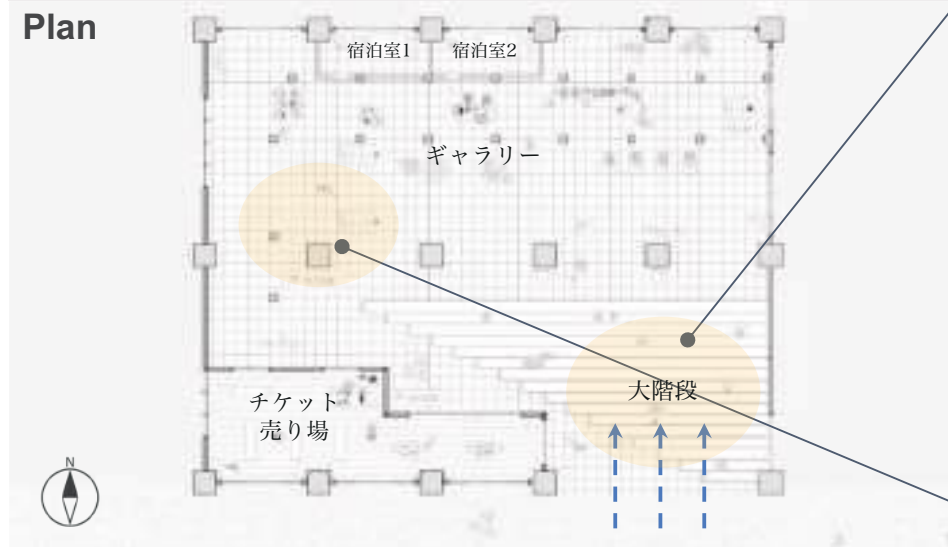
VISION

SITE:築地

Site



Plan



Perspective



①大きく吹き抜けた大空間は光や風を取り込み、都市の中での安らぎを生む。



②スラブと柱によってできる様々な空間では、自由なアクティビティが展開する。

SITE

PROBLEM

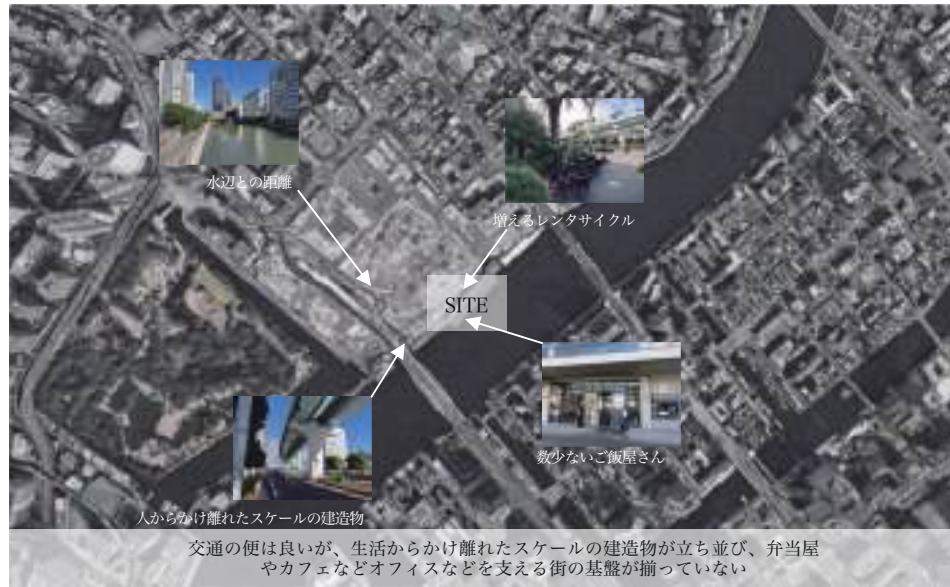
PROPOSAL

DESIGN

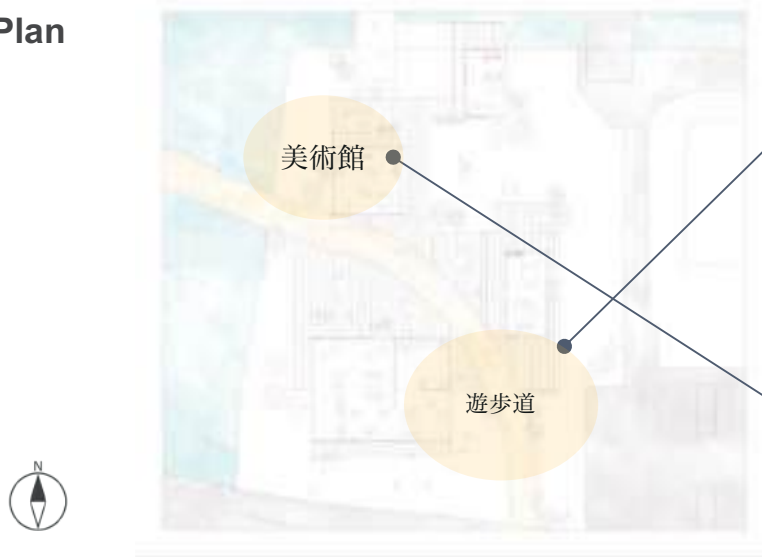
VISION

SITEC:日の出棧橋

Site



Plan



Perspective



SITE

PROBLEM

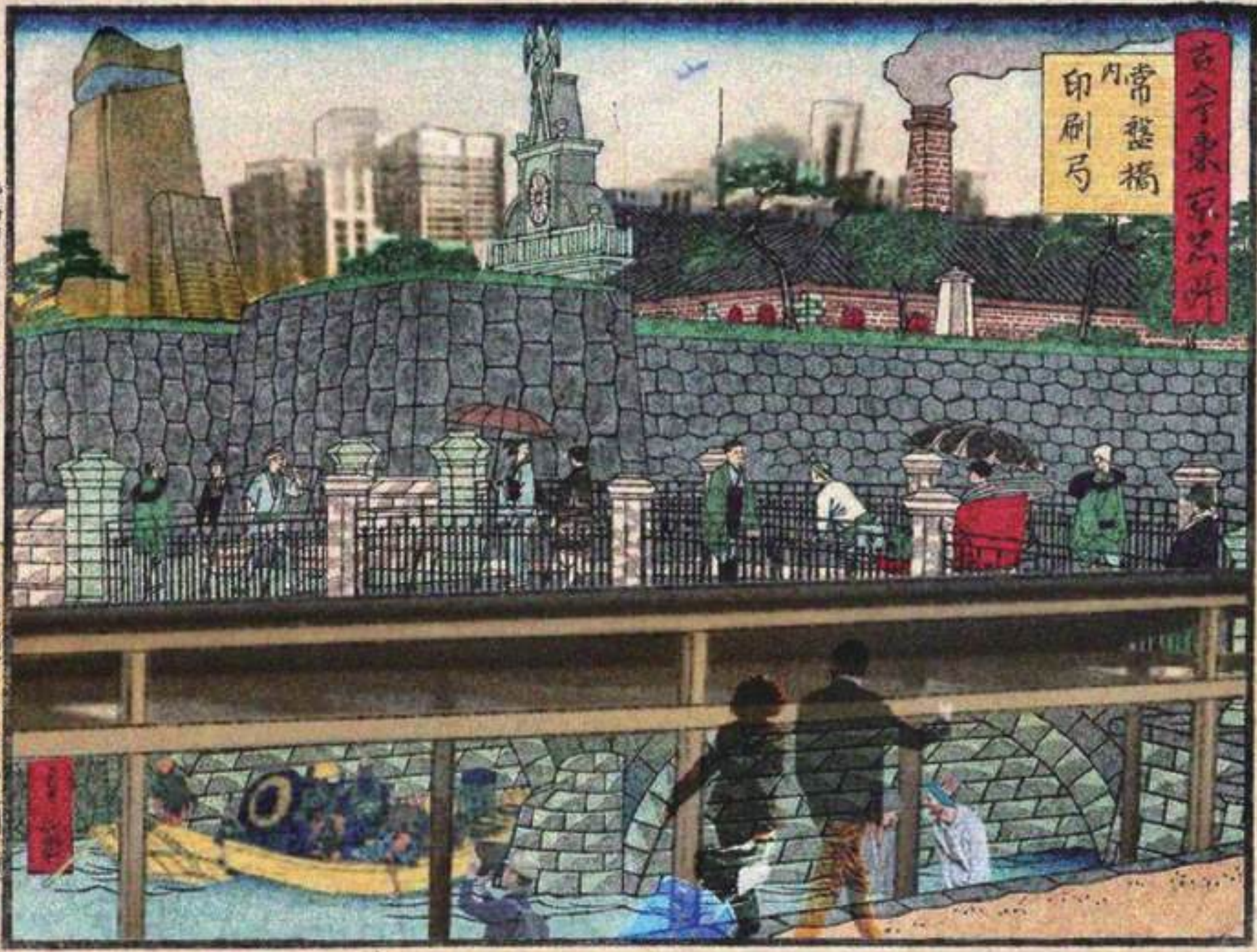
PROPOSAL

DESIGN

VISION

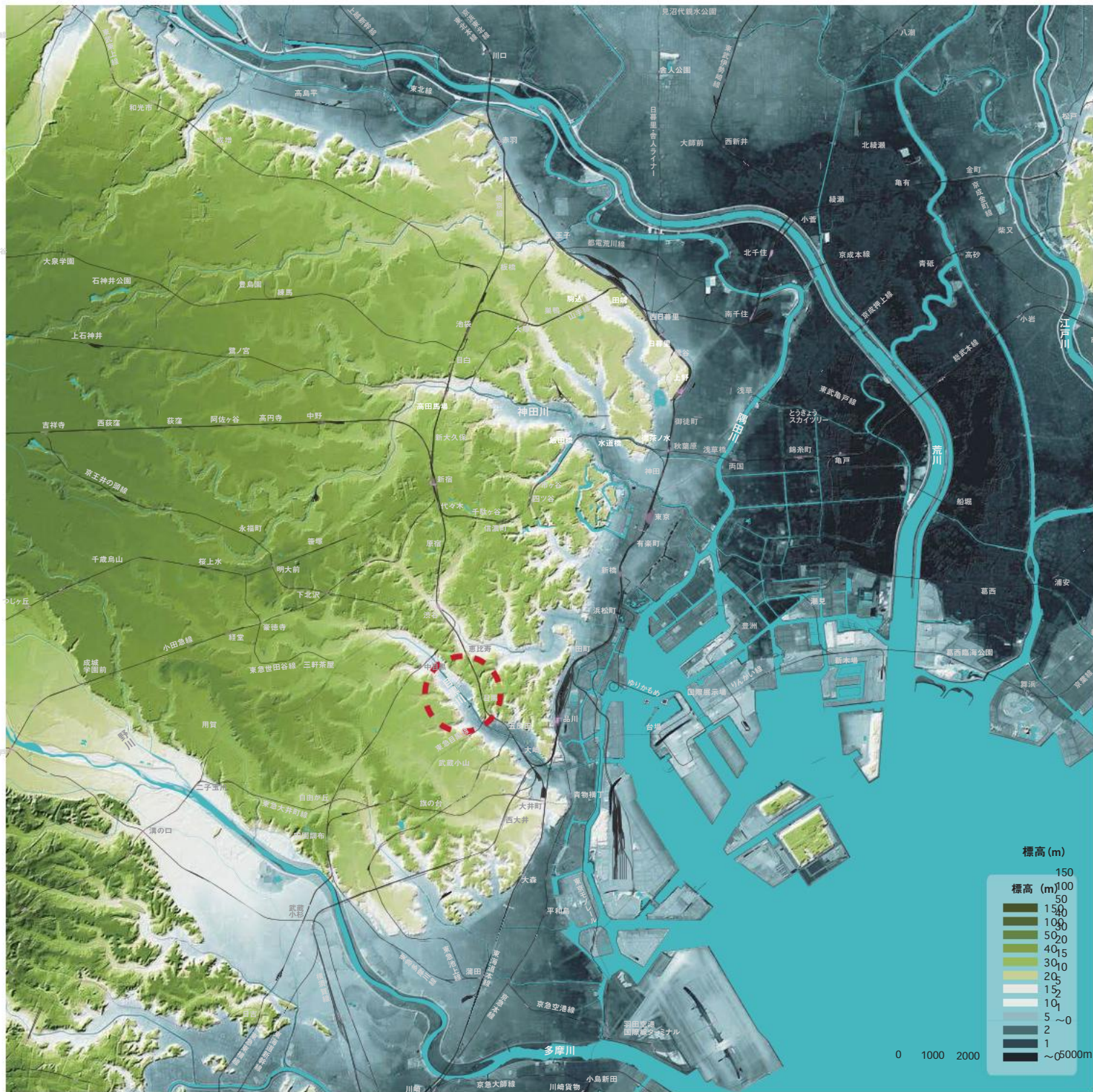
古今東京名所

常盤橋
印刷局



昭和十七年三月

出板人 横山町三丁目 吉田 文助



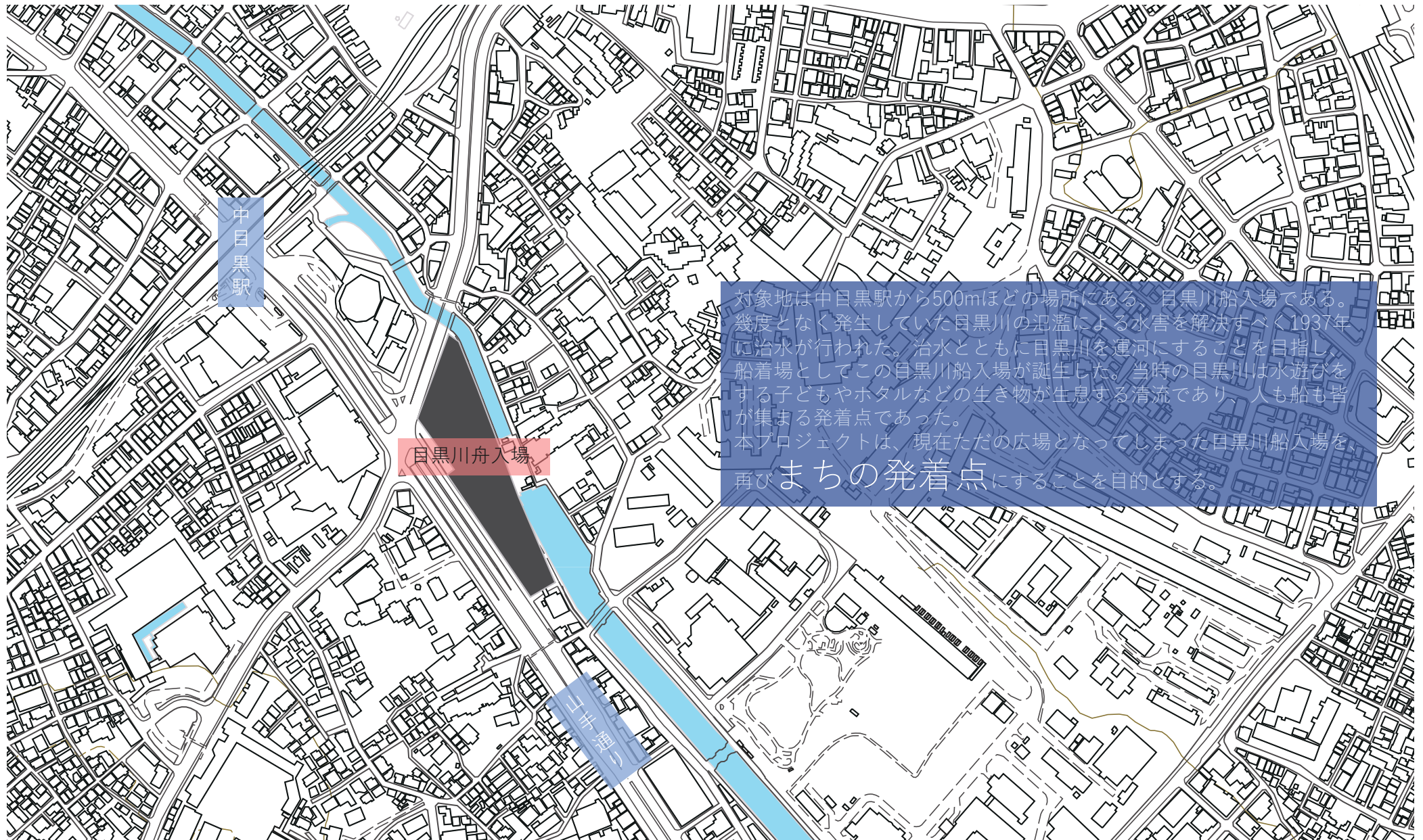
目黒川船着場を まちの発着点に

東京発掘プロジェクト 2022

“目黒川船入場をまちの発着点に”

22U1102 池田のどか
22U1161 八代加伊

01 はじめに



■目黒の歴史

目黒とはどういった土地なのかを掴むために地名の由来を挙げる。

- ①馬畔説：馬のあぜ道。
- ②地形説：め＝谷、くろ＝嶺を表す。目黒川と周囲の丘陵。
- ③不動説：目黒不動尊の目黒

馬畔説が有力とされているが、これらは全て目黒の特徴を表していると言える。地名から読み取れる目黒の特徴を挙げる。

- ①丘陵による高低差がある。
- ②水辺に栄えた豊かな土地。
- ③不動尊（寺）周辺の文化が栄えていた。

歌川広重の浮世絵からもその特徴が読み取れる。

「目黒行人坂富士」からは高低差や緑の豊かさうかがえる。

「目黒行人阪之図」からも高低差、および不動尊周辺の茶屋の賑わいの様子が分かる。参拝客が坂を上下する助けとして駕籠が使われていたと考えられる。

「江戸名所 目黒不動尊」では不動尊の様子が描かれているが、水の近くに立地しており、人で賑わっている。

当時寺の周りに発達した茶屋街は現代の繁華街のような場所であり、目黒、ひいては中目黒は経済と文化が栄えた土地であったと考えられる。



歌川広重「目黒行人坂富士」



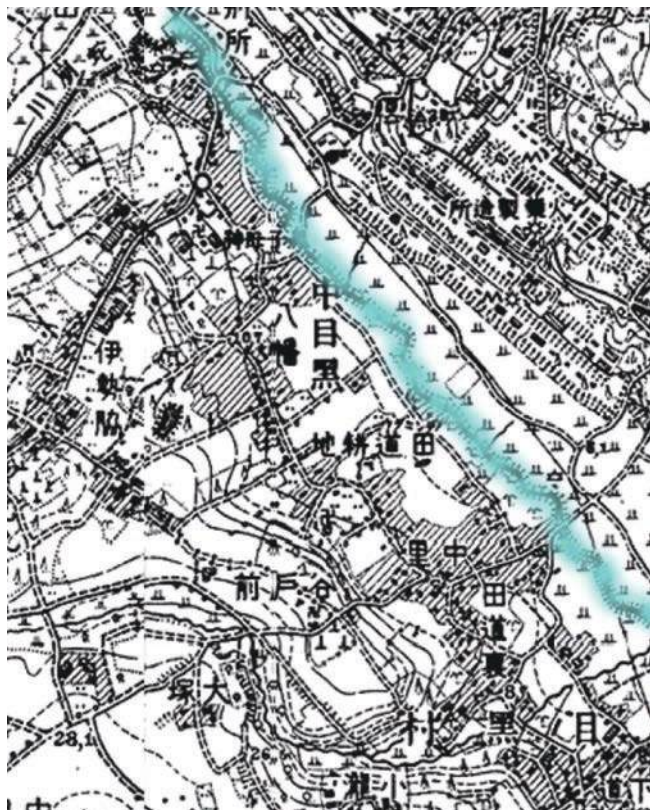
歌川広重「目黒行人坂富士」



歌川広重「江戸名所 目黒不動尊」

■目黒川の歴史

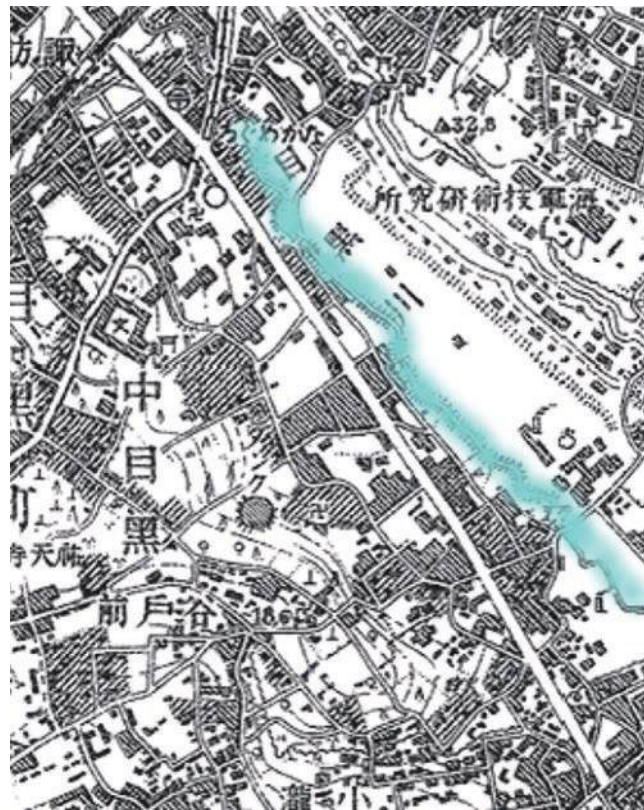
1896～



◎治水前-1

目黒川は蛇行している。
川の水は農工業に利用され、軍の火薬製造所が設置されたが、関東大震災で閉業した。川幅は狭く水深が深いため、大雨の度に氾濫していた。

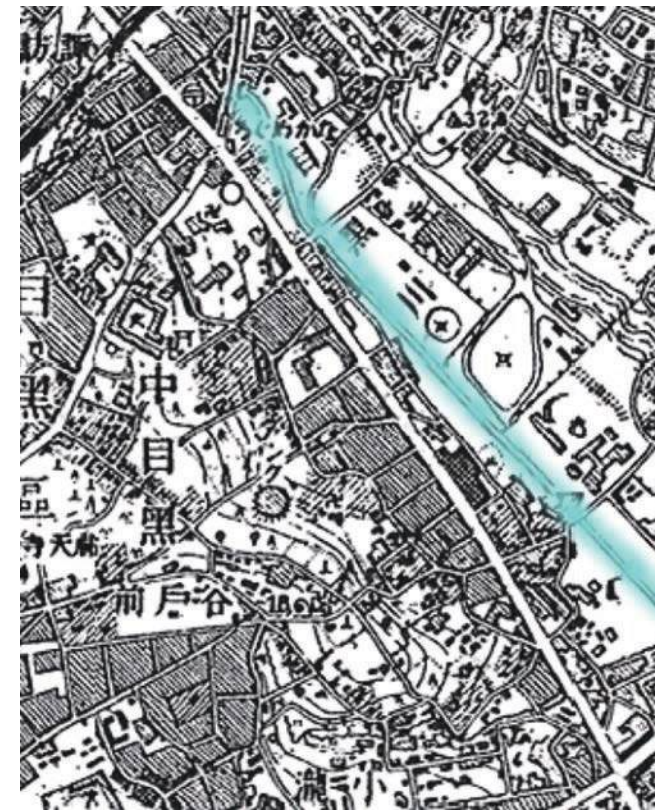
1927～



◎治水前-2

目黒川は蛇行している。
火薬製造所跡地に海軍技術研究所が設置された。この頃も大雨の度に氾濫し、度々水害に苦しんだ。

1944～



◎治水後

1937年、氾濫を抑えるとともに目黒川を運河にすることを目的として、目黒川の治水が行われた。川の流路は現在の姿になった。しかし、大雨が降るとたまに氾濫は起きていた。

■目黒川船入場の歴史



◎治水前

川幅が狭く水深が深いため、氾濫が多かった。戦前までは子どもが川遊びをしたりホタルがいたりする清流だった。1960年頃までは近隣の染物店が友禅流しをしていた。

◎治水

1937年、氾濫を抑えるとともに目黒川を運河にすることを目的として、目黒川の治水が行われた。船の発着点として、目黒川船入場が誕生した。

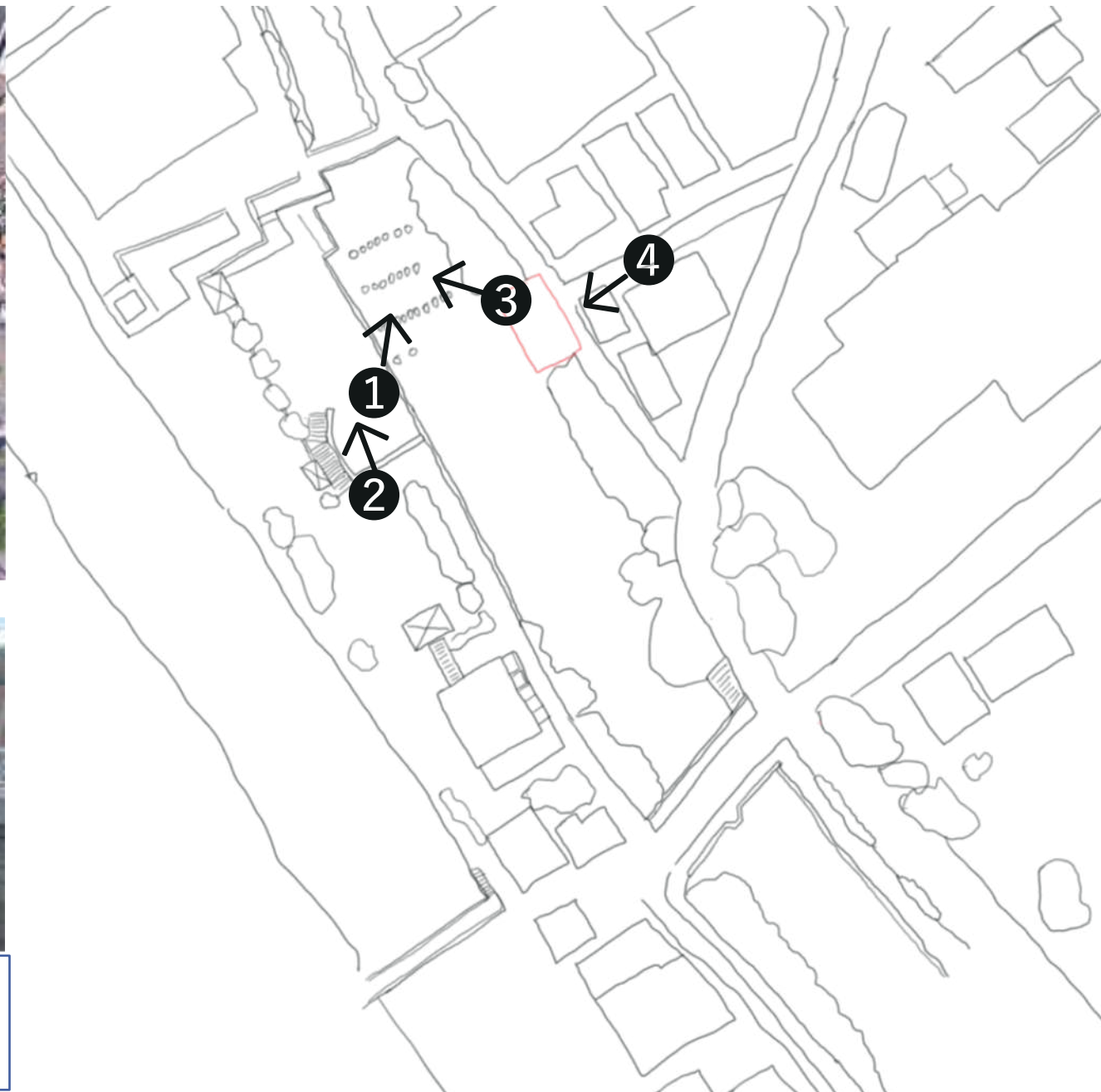
◎貯水池

治水をしてもなお時折氾濫が起きていた。そこで1994年、既に船の通行はなくなり、船着場としての機能をなくした目黒川船入場の地下に貯水池を設け、現在の姿になった。

03 現状



目黒川舟入場は山手通りと目黒川の間に位置しており、山手通りと同じ高さの広場（A）とAから3mほど低い高さの広場（B）と閉館して空き家となっている川の資料館跡（C）の3つのエリアに分けられる。

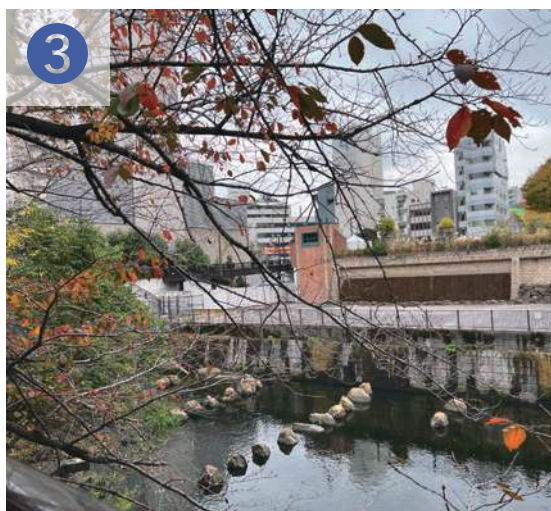




1
広場Bから目黒川を見る。
治水の際設置された飛石で鳥がとまる。
現在は治水状の機能はない。



2
広場Aから広場Aを見る。
自転車が無造作に多数停められている。
遊ぶ子どもや鳥を眺める大人がいる。



3
川の対岸のベンチから広場Bを見る。
目黒川手前に桜の枝がしなだれている。
春季の景観が期待できる。



4
③のベンチを見る。
ベンチ上には緑廊が整備され落ち着く。
タバコや酒のゴミが放置されている。

■立地について

中目黒駅南東部500mほどの場所に位置山手通りと目黒川の間に位置する。飲食店などが立ち並ぶ繁華街は駅の北側に集中しており、目黒川舟入場の周辺は住宅街や教育施設、病院など地元住民の生活に密着するエリアであると言える。山手通りは自動車の交通量が多いが、道路から川との繋がりは感じられない。

■現状の目黒川舟入場の魅力

- ①目黒川沿いの桜並木の観光資源としての価値
- ②駅から徒歩5分というアクセスによる集客の見込み
- ③川沿いの遊歩道の散歩・ウォーキングの人流の多さ
- ④自由に子どもがボール遊びをできる環境
- ⑤鳥や魚などの動物が住むことができる環境

■現状の目黒川舟入場の課題

- ①駅以北への来訪者が訪れることが少ない。
- ②散歩やウォーキングをしている人が滞留する空間がない。
- ③川は物理的には近いが心理的距離が遠い。
- ④対岸と隔絶しており繋がりが感じられない。
- ⑤周辺のベンチにゴミがポイ捨てしてあり治安が不安。



整備された遊歩道



隔絶された対岸

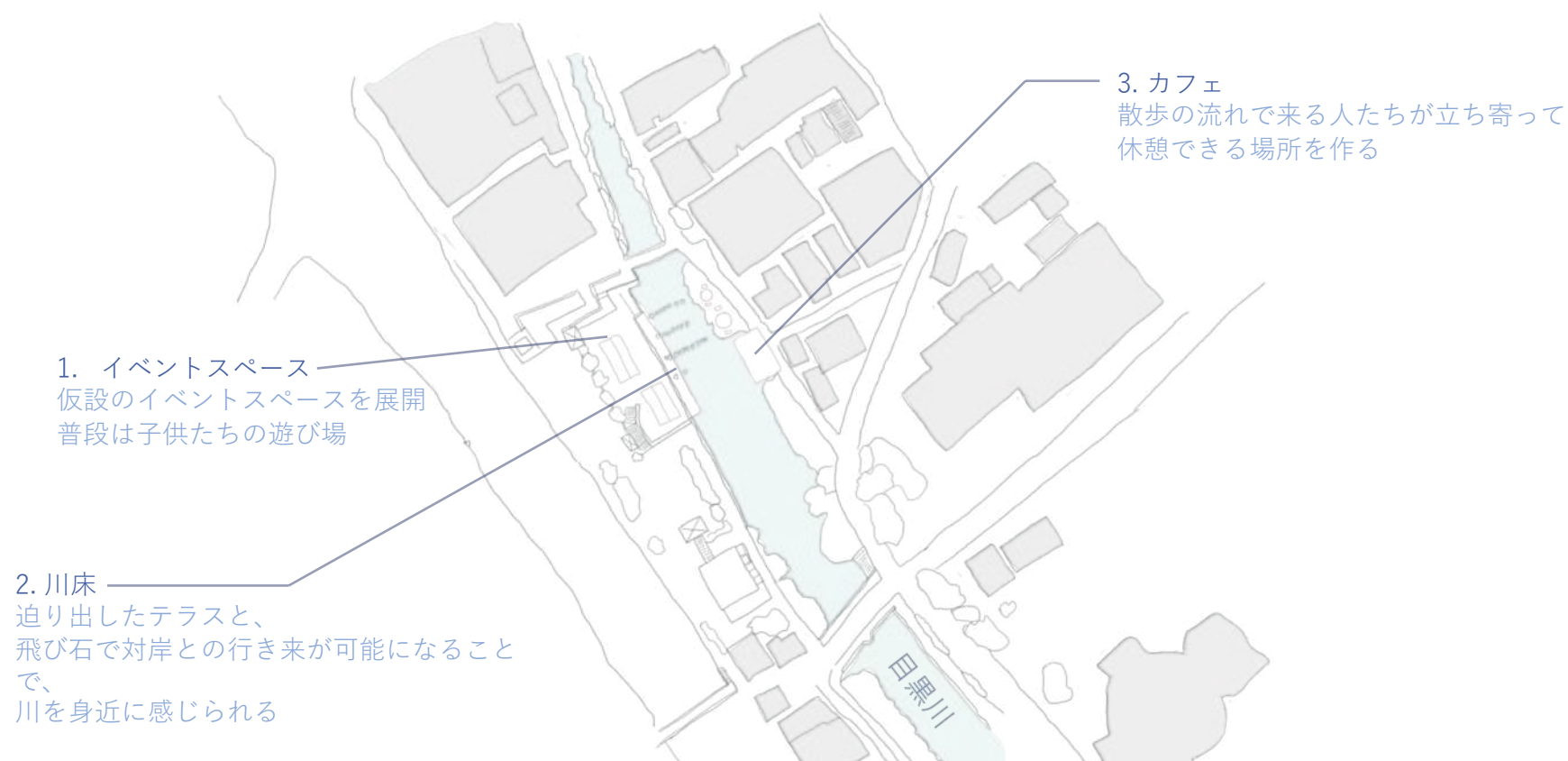
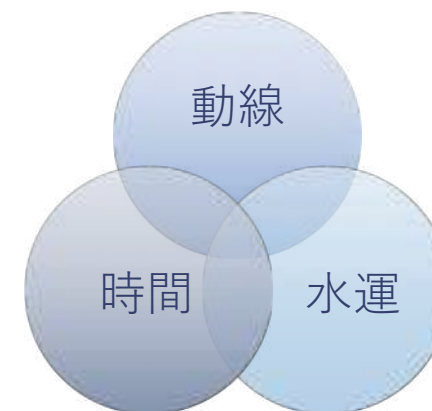


ポイ捨てへの注意

■コンセプト

「まちの発着点」

人々が行き交う動線として、
子供からお年寄りまで、ここで成長し、再び帰ってくる場所として、
水運の基点として



04 提案

■既存プロジェクト

FUNAIRI-BA



◎コミュニティーの場
◎文化情報発信の場
◎新たなランドマーク として、
Hirobaとtatemonoからなる複合施設
2023年4月に開業。

■既存広場の保存と活用方法

▽放課後、子供が遊び回る様子



イベントスペースは簡易的なものにする



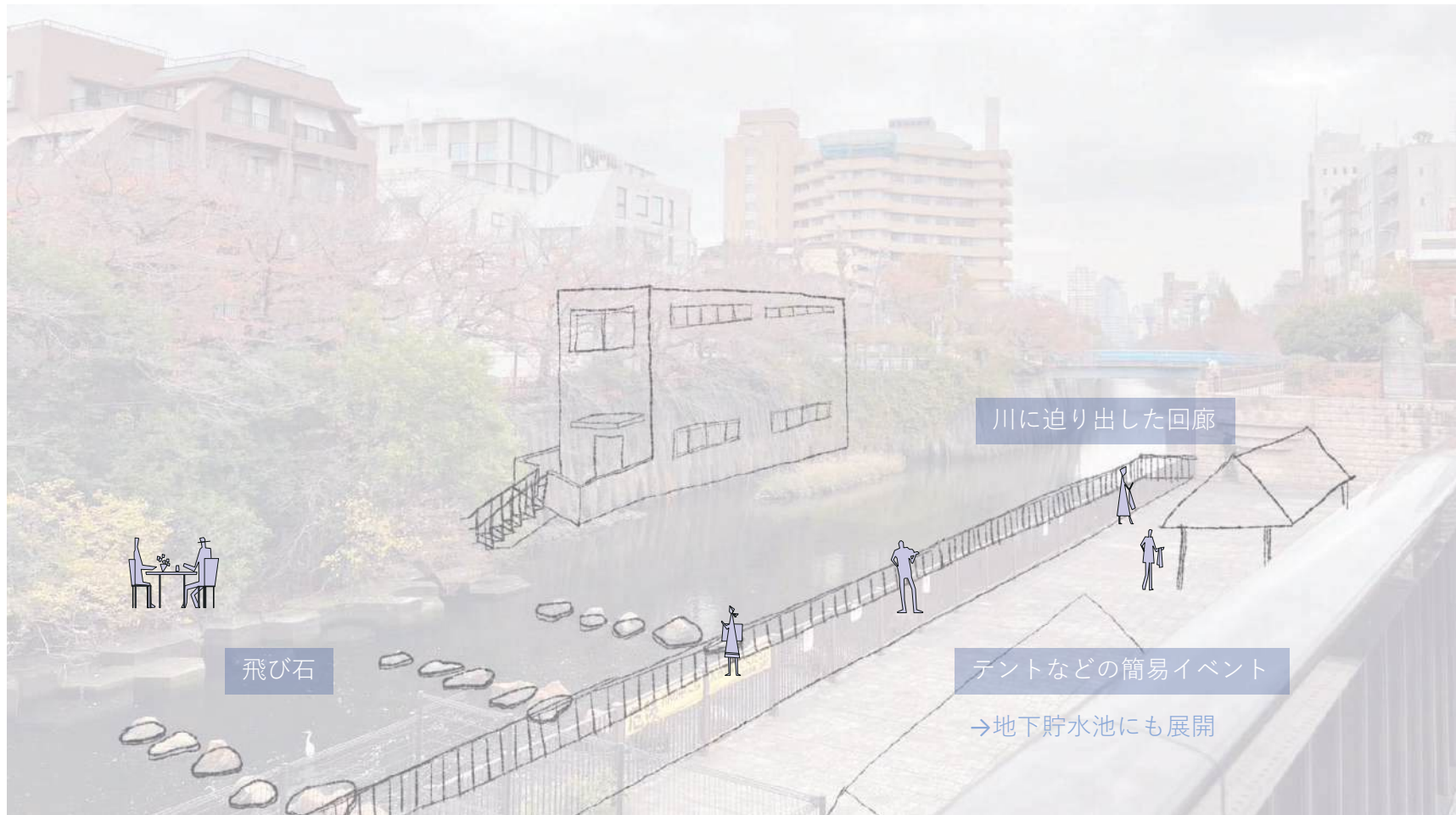
何もない状態の時間も確保する



元からある自由な空間性の保存

04 提案

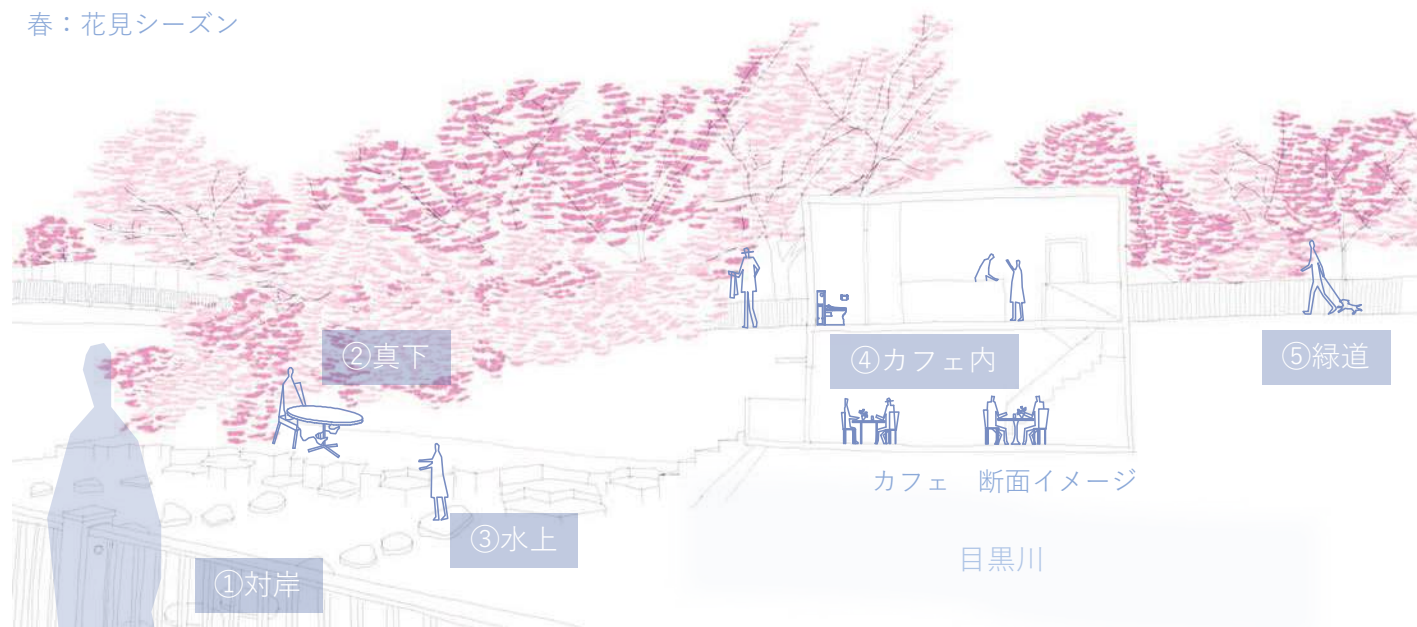
1. イベントスペース
2. 川床



- ・旧川の資料館内に設置するの知るカフェで集客
- ・回廊などのひりスペースを利用して、歩いてくる人が休憩できる溜まり場を作る
- ・広場A,Bは仮説のイベントがメインで、普段はフリースペースとして利用
- ・飛石に降りることによって対岸へも行くことができ、川との距離が接近する

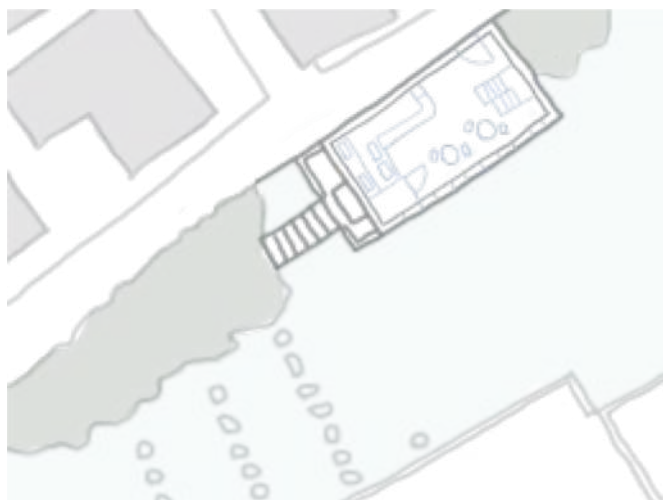
3. カフェ

春：花見シーズン



目黒川

- ・ ①～⑤の異なった視点から桜を見たり、体感したりできる
- ・ 花見などのイベント時だけでなく、ウォーキングの休憩や用事のついで、子供が遊んでいるのを待つときなど使い道は様々なカフェ
- ・ 普段から利用することで日常に入り込んだ場所になる
- ・ この施設を中心に、岸沿いの緑道の美化活動を広げる



地階 平面イメージ



半地下階 平面イメージ

河岸の更新

—時代を刻む日本橋川—

22U1136 出嶋優衣
22U1139 中釜英里香



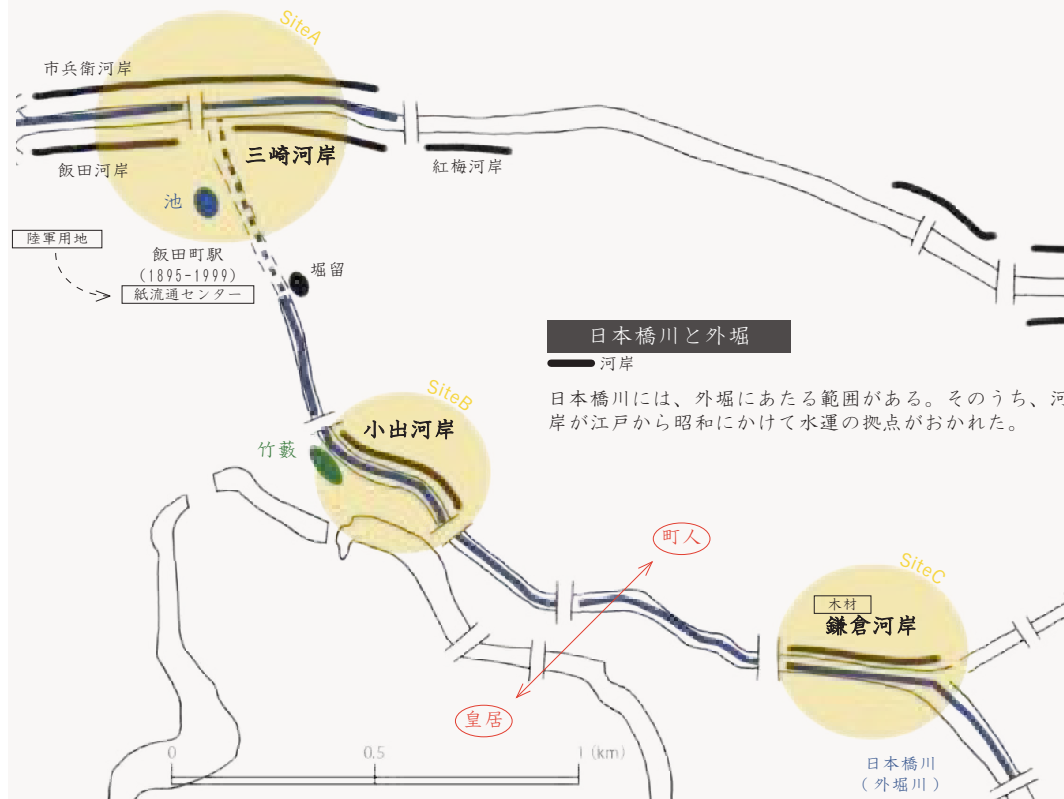
—日本橋川—

神田川から分派し、神田、大手町、日本橋といった首都の中心部を流れ、隅田川に合流する全長4.84kmの河川。

水運の便が良かったことから、江戸から近代に至るまで経済・運輸・文化の中心として栄えた。周辺には河岸が点在し、全国から江戸・東京にやってくる商品で賑わった。

対象地域

ー江戸を支えた日本橋川の3つの河岸ー



Site ごとの特徴



ー選定理由ー

日本橋川にはかつて河岸が多く点在していた。そのうち、現在も「防災船着き場」として船着き場が置かれている三崎河岸、小出河岸、鎌倉河岸に注目した。しかし現在は緊急時以外には利用されていない閑じられた船着き場となっている。そこで、“水運の拠点として積極的に使われていた場所”として再評価し、普段から積極的な利用が可能な防災船着き場として再編する。

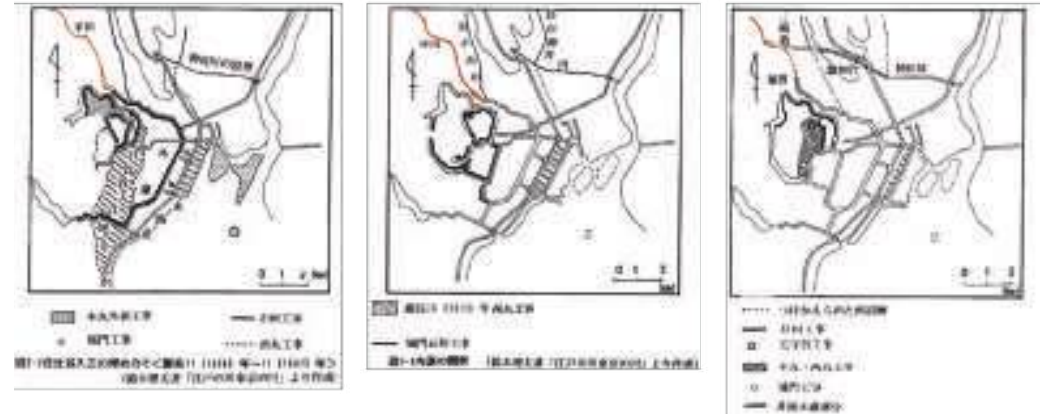
日本橋川の変遷

ー平川から外堀、日本橋川へ流れる水ー

大きく変化する江戸

平川

平川が外堀と繋がり、付け替えられた。

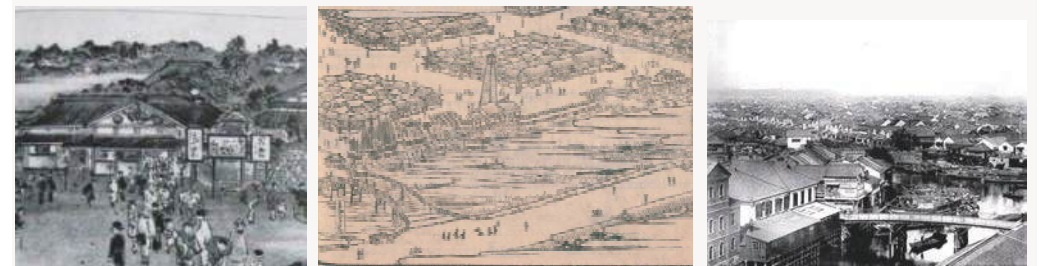


3カ所の“河岸”

三崎河岸・小出河岸・鎌倉河岸

外堀にもあたる3カ所は、違う特色がある。

① 飯田町駅（三崎河岸周辺） ② 組橋（小出河岸周辺） ③ 鎌倉河岸



参考文献

- 〔表紙〕絵本江戸土産（広重）第5編 03 鎌倉河岸（未）
- 〔河岸配置図・平川の変遷〕「江戸の川東京の川」（鈴木理夫著）
- 〔小出河岸・鎌倉河岸地図〕五千分一東京図測量原図（農研機構）Map in Tokyo Central (1883 (Meiji 17), 1:5000)
- 〔三崎河岸地図〕今昔マップより, <https://ktgis.net/kjmapw/>
- 〔飯田町駅絵図〕明治東京名所図会「飯田町停車場」
- 〔組橋絵図〕江戸名所図会 7 巻（松海軒斎藤長秋 著，長谷川雪旦 画），国立国会図書館デジタルコレクション
- 〔鎌倉河岸古写真〕東京古写真, <https://ozsons.jp/TokyoOldPhoto.htm>

江戸

明治

◎ 1596-1614 年
鎌倉河岸成立

◎ 1620 年平川埋め立て

◎ 1804-1817 年
小出河岸成立

◎ 1882 年 三崎河岸成立

◎ 1884 年 雉子橋邸→フランス大使館

◎ 1890 年 三崎町成立

◎ 1895 年 開業

◎ 1902 年平川復活

SiteA

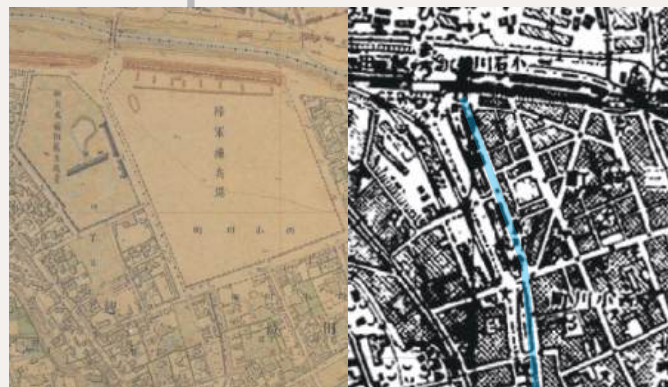
三崎河岸

- 陸軍用地 -

陸軍の荷揚げ場として利用ののち、明治時代にできた町三崎町の水運として利用された河岸



平川の埋め立てにより、江戸時代の地図では川が見えない。武家屋敷が広がっており、松平讃岐守が多く土地を持つ。



河岸の名前の由来となった、小出英竹がおさめていた土地が広がっている。江戸城のお堀に近い位置にあるため、川を挟んで向かい側には犬を収容するための御用屋舗や馬小屋があった。この河岸の特徴であるカーブが江戸時代からあるのがわかる



SiteB

小出河岸

- 町人地 -

町人のための荷揚げ場として活用された河岸

SiteC

鎌倉河岸

- 官用地 -

江戸城整備の際に、相模国からきた材木や石材の荷上場として栄えた河岸



徳川家康が江戸に入府した際、鎌倉（現在の神奈川県鎌倉市付近）から石材を運び込み、この河岸に陸揚げした。河岸周辺には、大工たちが集まり、店が作られ、繁華街として賑わった。豊島屋という酒屋がありそこで販売されていた「白酒」は有名だった。(☆2)

武家屋敷があった場合は、陸軍の練兵場が広がっていた。1890年に三菱に松下げられ、三崎町が作られた。地図の赤く塗られている場合は、煉瓦の商店街が広がっていた。(☆1) 1890年に飯田町駅も開業した。

明治期の地図を見ると、河岸が川側に広がっており、江戸と比べると川幅がせまくなっているのがわかる。河岸の向かいには、フランス大使館があり、庭園が広々と広がっているのが見て取れる。



フランス大使館は、もともと大隈重信の雉子橋邸であった。写真からわかるように、西洋家屋に小さな塔が付属していた。

河岸が陸地に対して広がるように位置していることがわかる。地図上に木置場の記述があり、河岸の3分の1が材木置き場として活用されていたことが見て取れる。河岸の向かいには、大蔵省の印刷局が広範囲に広がっていた。



写真の建物は朝陽閣と呼ばれ、後ろには大蔵省印刷局があり赤煉瓦二階建ての建物だった。関東大震災の際に、全焼した。

大正

甲武線

飯田町駅

昭和

◎ 1999

平成

◎ 1999 廃業

令和

◎ 1963 年 神竜小学校廃業

◎ 2007 年 千代田区役所 現在の場に移転

◎ 2019 年 ナインアワーズ開業

首都高5号線池袋線

◎ 1964 年 着工

◎ 1993 年 前線開通



高速がかかる前の写真を見ると、飯田町前に荷下ろし場が川に対して広がっているのが見て取れる。

また、三崎町の六つ又路も残っているのがわかる。



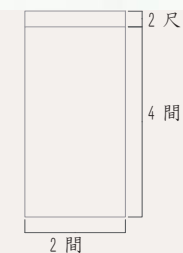
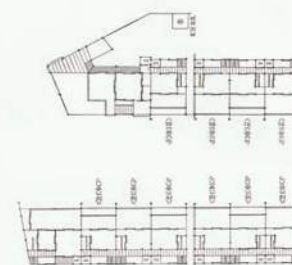
フランス大使館にあった、庭園が残っているのが見て取れる。フランス大使館があった場には、官公署の建物ができている。



1963年に廃校になった神竜小学校は、校庭が川側に広がっており、川に意識が向いていたことが見て取れる。河岸周辺には、ビルが増えた。



★1 三崎町 煉瓦商店街 長屋 UNIT

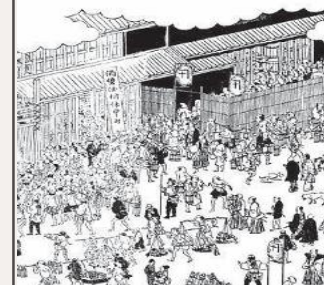


三菱のタウンプランニングとして、六つ又路が作られ、赤煉瓦の商店街が道に並び、栄えていた。

この商店街は、1軒が幅2間(けん)、奥行き4間の長屋である商店が並んでいた。2尺ほど軒先が出ており、職住が一緒の長屋であった。また、手前が店で、奥に5畳の和室、押入れが1畳分あり、板の間2畳分を挟んで、土間があり隅に台所と便所があった。

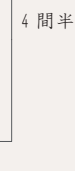
長屋の特徴として、3.6m×7.2mのUNITであることがあげられる。

★2 鎌倉河岸 江戸時代 町人長屋

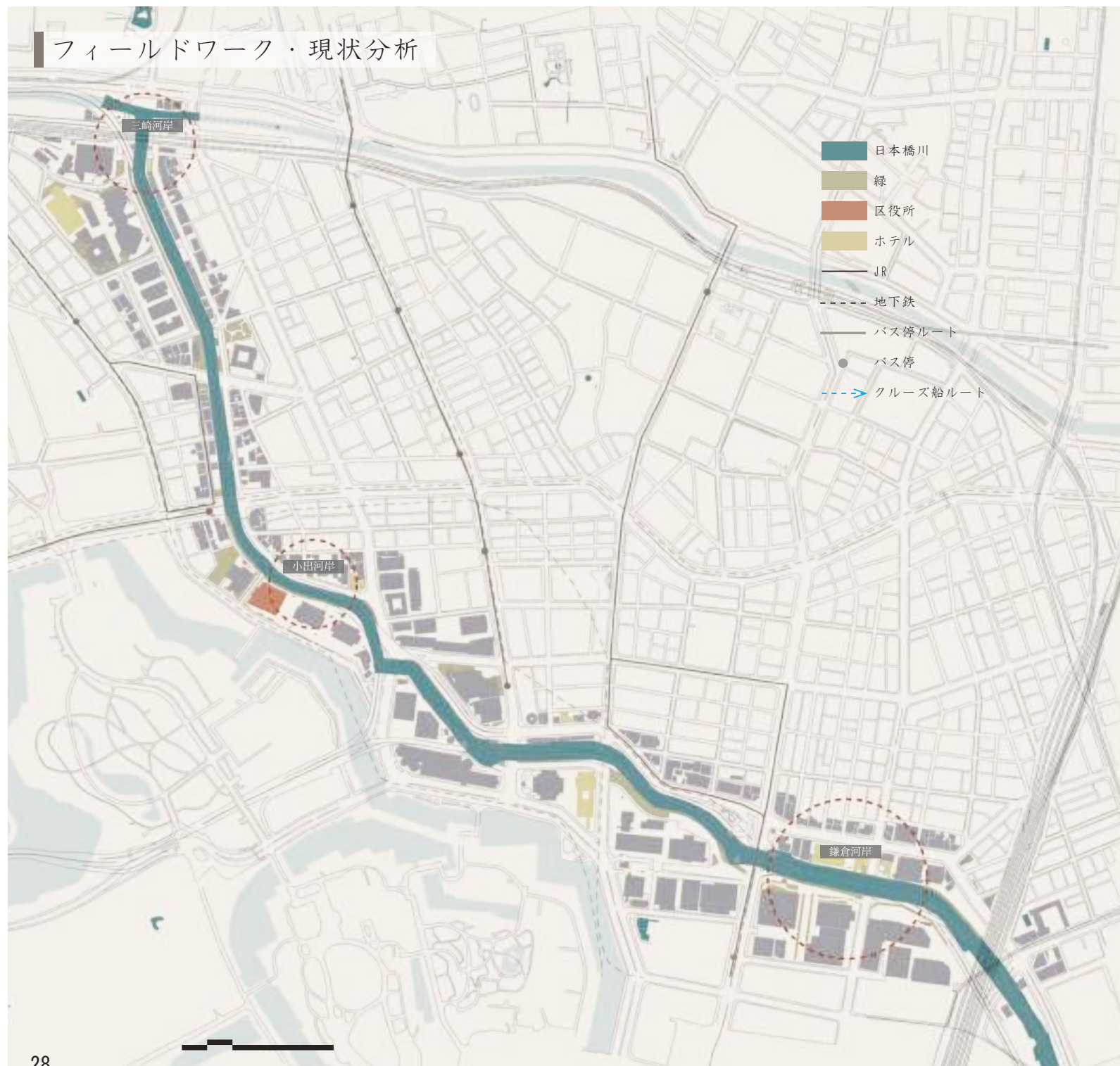


大工が集まることで、繁華街をなし、豊島屋の写真のように賑わっていた。2階建てであること、大工の道具に面していることから、表長屋であることが考えられる。他に、裏道で商いをおこなう建物は裏長屋であり、表長屋のほうが比較的裕福な商人が商売をしていた。表長屋は、幅が2間、奥行きが4間半の長屋である。

この長屋の特徴として、3.6m×8.2mのUNITであることがあげられる。



フィールドワーク・現状分析



3つの河岸の現状

1 三崎河岸



2 小出河岸



3 鎌倉河岸



三崎河岸

三崎河岸は、石畳・枝垂れ桜・赤煉瓦造・線路跡のような遺構が多く残ることが特徴的であった。



① 防災船着き場
(筆者撮影)



② 高架下 赤煉瓦造の壁
(筆者撮影)



③ 小石川御門 石畳
(筆者撮影)



④ 枝垂れ桜と中央線
(こちら神保町 HP より)



⑤ 飯田町駅 線路跡
(鉄道チャンネル HP より)



⑥ ナインアワーズ
(筆者撮影)

小出河岸

小出河岸は、高速の柱の並びやカーブが面白い。ビルが建ち並んでおり道が狭いことが特徴的であった。



① 防災船着き場
(筆者撮影)



② 千代田区役所
(ITOT HP より)



③ 九段下こども広場
(株式会社スタイルエージェント
HP より)



④ 高速の柱のリズム
(筆者撮影)



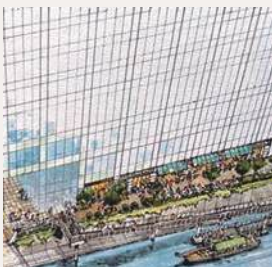
⑤ 日本橋川のカーブ
(筆者撮影)



⑥ 区役所前通りの狭さ
(googleMAP より)

鎌倉河岸

鎌倉河岸は、新しいプロジェクトが進行中なこと・エコミュージアムがあることから未来的な印象を受ける。河岸跡が残ることが特徴的であった。



① 防災船着き場 (予定)
(建設通信新聞 より)



② 内神田プロジェクト
建設予定地
(googleMAP より)



③ 鎌倉河岸 (昔)
鎌倉河岸 (今)
(昔・wikipedia 今・筆者撮影より)



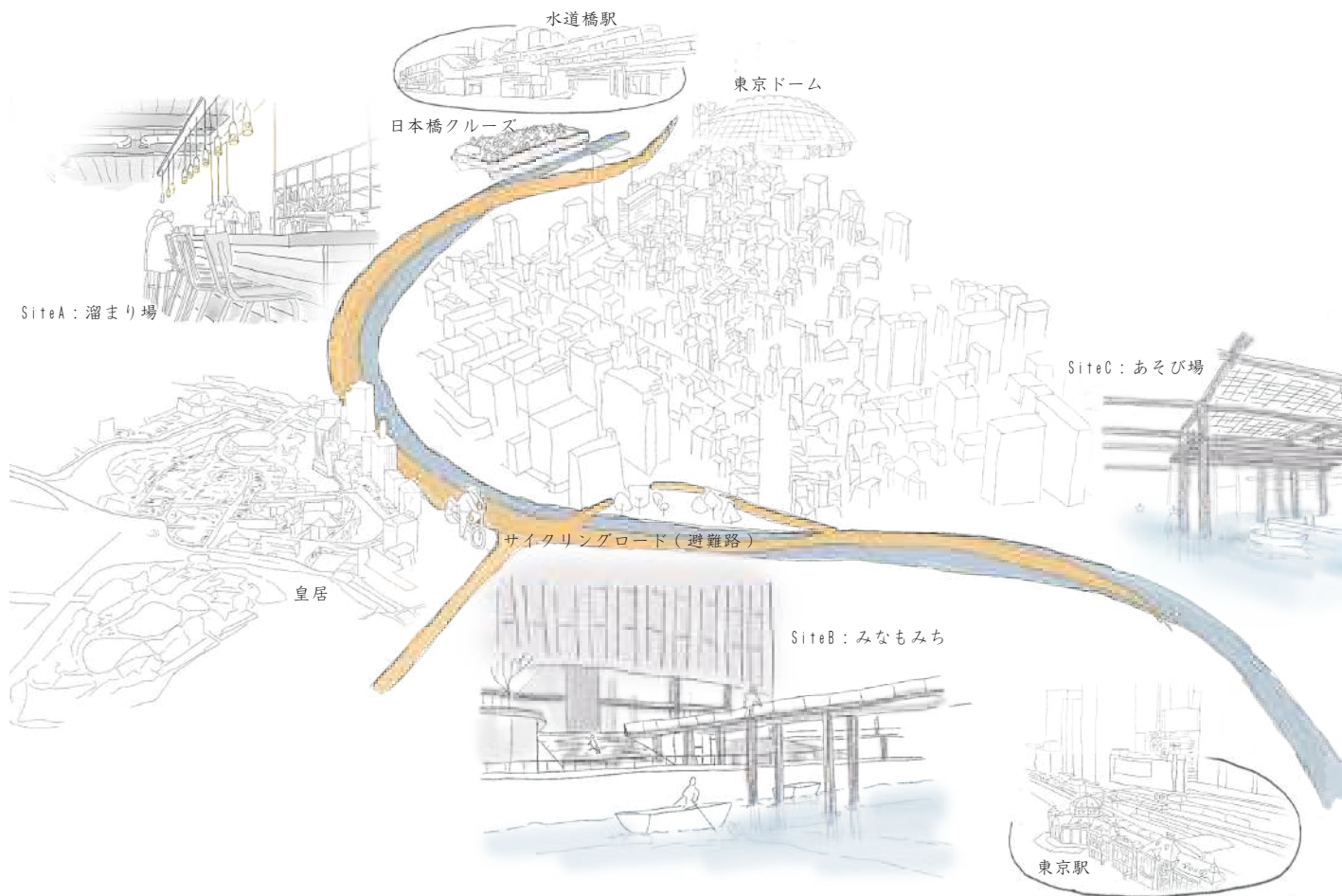
④ 三井ガーデンホテル
(JTB HP より)



⑤ 千代田区立
スポーツセンター
(スポーツセンター HP より)



⑥ エコミュージアム
カフェ
(筆者撮影)



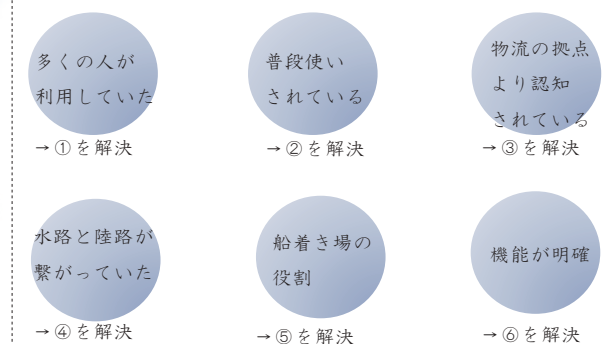
1. 河岸から防災船着き場 (時間的分析)

(1) 防災船着き場の課題



- ① 防災船着き場が普段使われない
- ② 緊急時に使うことができない
- ③ 認知されていない
- ④ アクセスルート (他の公共交通機関・車) がわかりにくい
- ⑤ 夜間利用ができない (確率されていない)
- ⑦ 機能 (トイレ・休憩スペース) がない

(2) 河岸から抽出

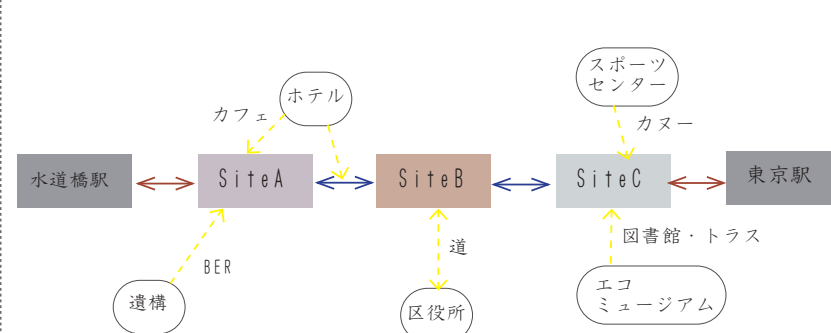


2. 水路と駅をつながり

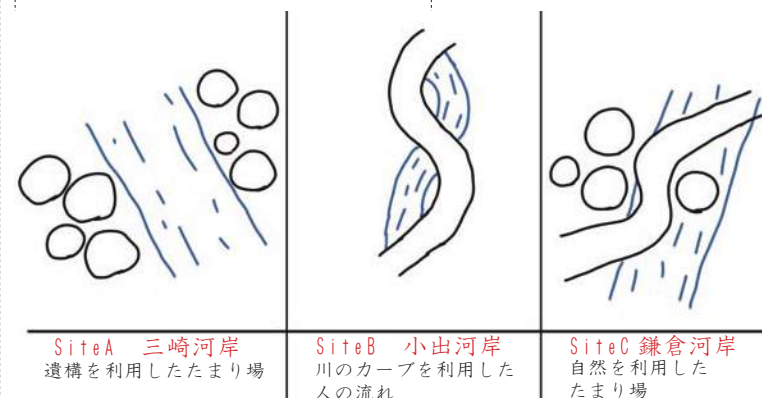


日本橋に総合船着き場があり、駅や観光地を川がつなげることができる。
(地図・大江戸日本橋クルージングHPより)

3. 川と陸をつながり



4. ダイアグラム



【諸調を生む河岸、繋ぐ日本橋川】

水辺が積極的に利用されていた河岸を再評価し、現代の防災船着き場に再編する。

現状の特徴

SiteA: 歴史 - 石垣・線路跡・煉瓦壁等

SiteB: 曲線 - 市役所等

SiteC: 観光 - エコミュージアム等

+ 河岸の再編
護岸をなだらかに陸と川を繋ぐ

川

歴史が織りなす“溜まり場”

石垣や線路跡、煉瓦壁が今もなお残る。川が閉じられたり、開かれたり、鉄道の駅ができたりと、変化をしてきた。

現状の遺構や歴史を彩るモノに新たな付加価値を付け加えていく。



水と絡まる“みなもどおり”

日本橋川が大きなカーブを描くこのエリアは、区役所等の施設が建ち並んでおり、街拠点となる。

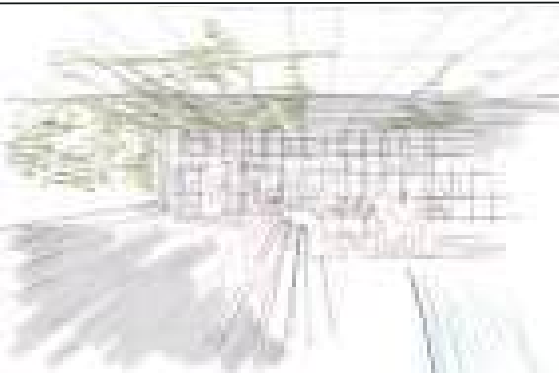
つまり「防災」の際にも情報の拠点となるため、新たに様々なルートを設定した。



自然と観光の結節点“あそび場”

エコミュージアムが現在川の近くにあり、護岸にもつる植物が垂れ下る。植物に囲まれ、また来訪者が見込める施設が多く点在してる。

「たな」を通して、自然に学びの場を広げる。

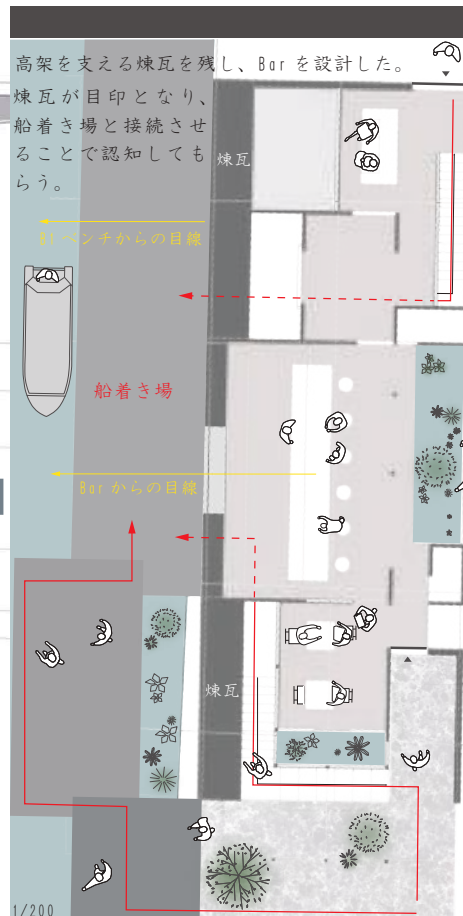
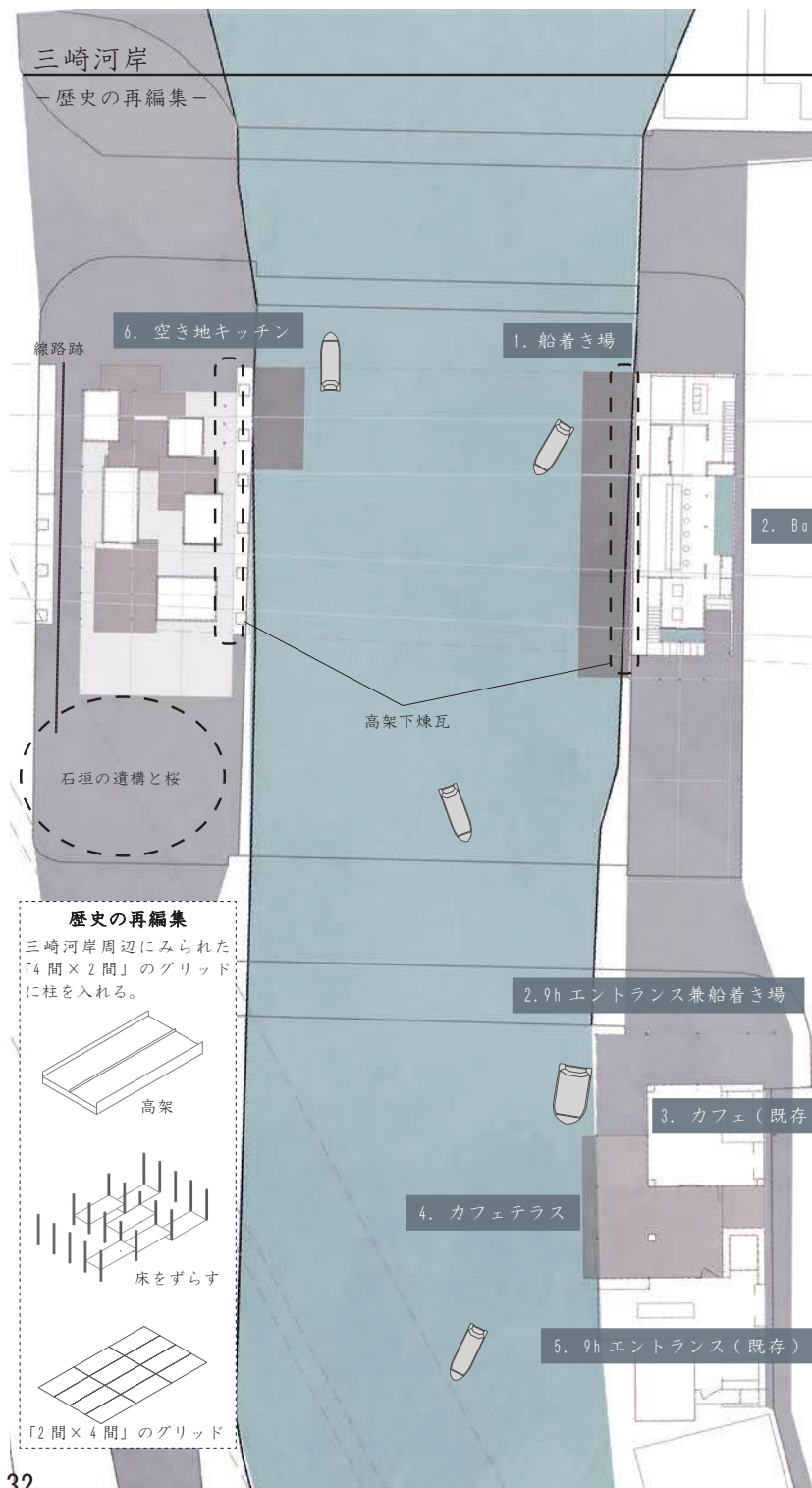


「水が繋ぐ歴史」水道橋 - 神田 イメージ地図



三崎河岸

—歴史の再編集—



Bar

現状の更新



既存（煉瓦＋防災船着き場）× Bar

現在も三崎にある煉瓦と防災船着き場に Bar を用いて人を集める。普段から利用してもらうことで、認知度を上げる。

煉瓦を支える高架と川の風景



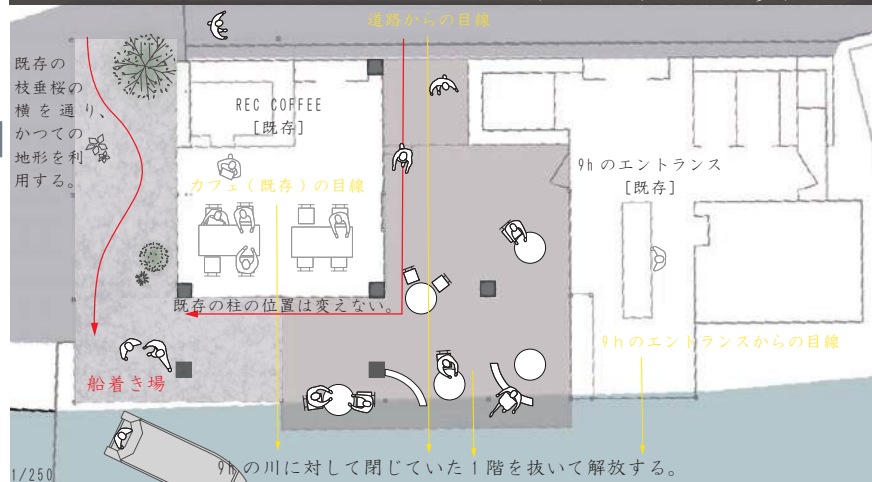
閉じられた三崎の防災船着き場



Bar
× 高架下の暗さが →
空間を演出



カフェテラス（9h の改修）



川から背を向けるビル群
かつて川に向いていた人々の視線は、ビル群が壁となり閉ざされた。そこで川に面した活動の拠点の川に広げていく。



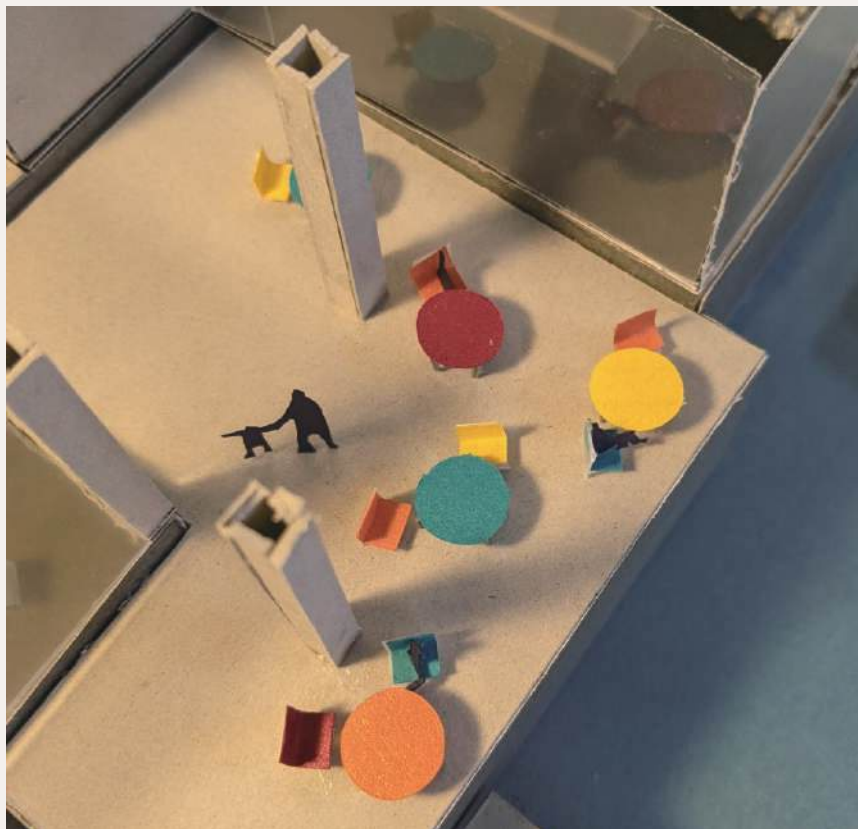
水のほとりでとどまる

ホテル・カフェを
川とつなげる



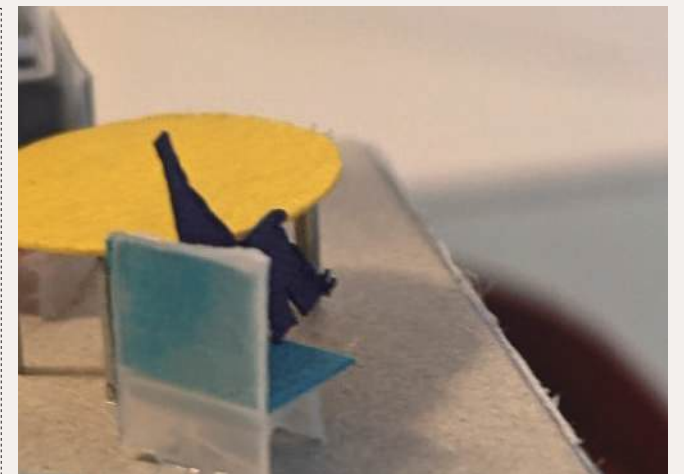
道から川を見る

道から動線のぬけ
カフェの視線のぬけ



私の特等席

川を見ながら、TEA TIME





道からのぞく

道からの視線

BER カウンターからの視線



川でとどまる

川と遺構を感じる



私の特等席

障子からさす光とともに飲む



煉瓦のすきまから

船を眺めながら船を待つ



障子からぼやける景色

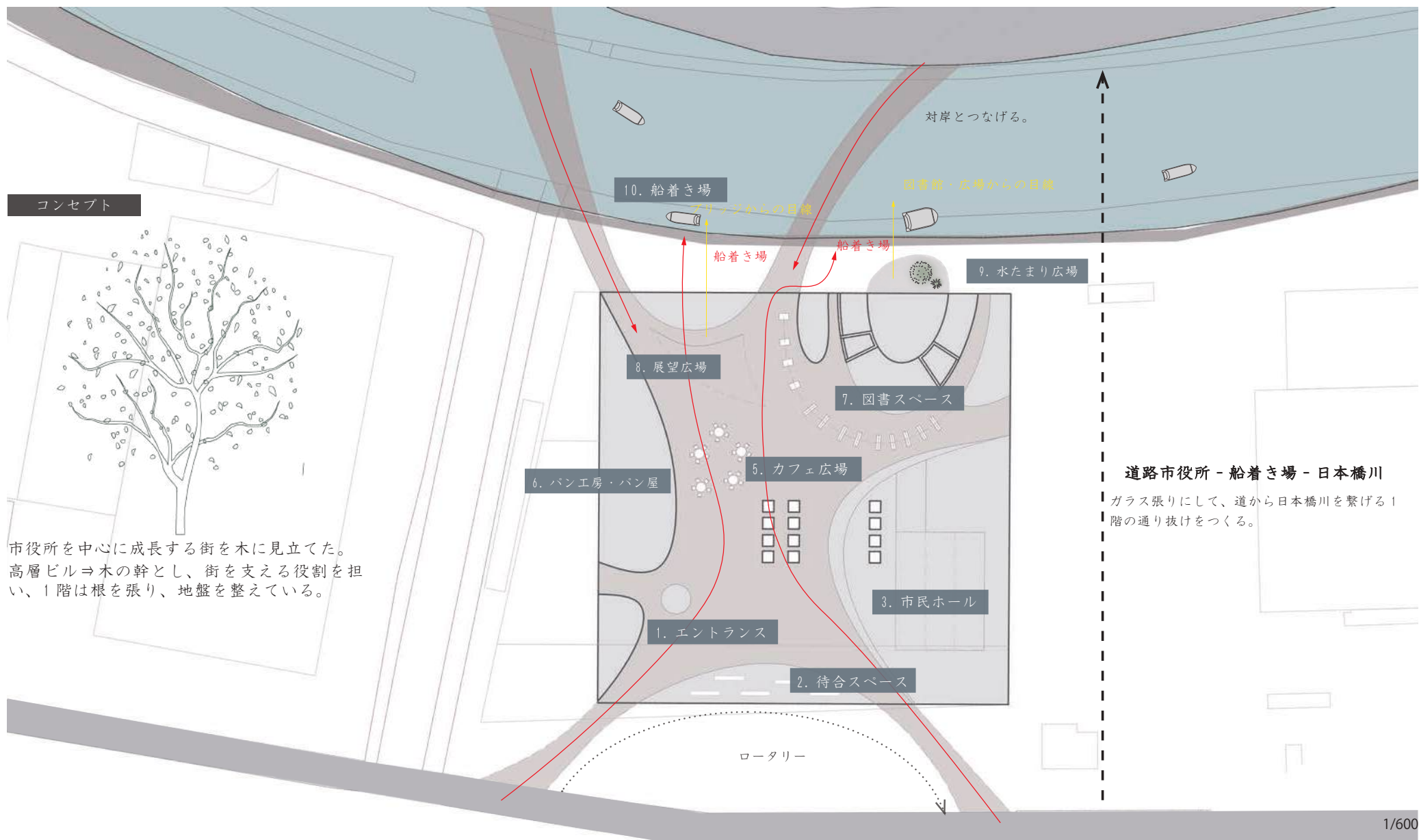
障子に映る景色と自然光を感じる



地下への階段

植物をたどって船着き場へ





みなもどおり

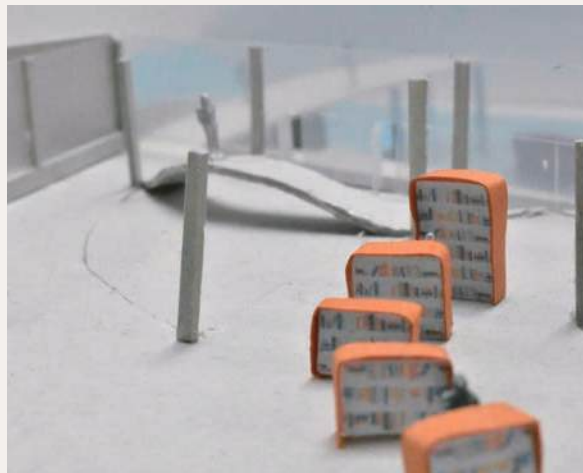
川の上を歩く



区役所に広がる

みなもどおり

道と川をた建物に内部から見る



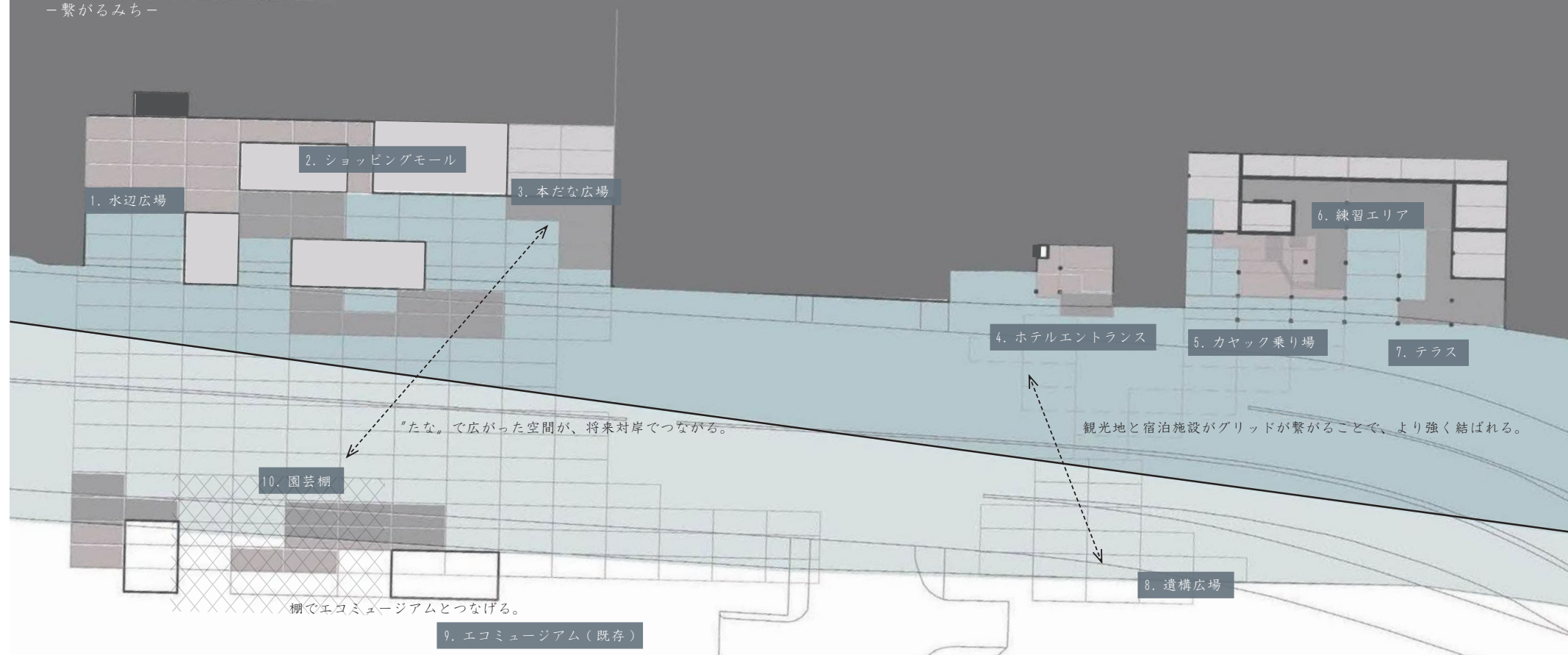
みなもどおりと人々

走る人と登る人



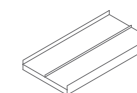
鎌倉河岸

—繋がるまち—

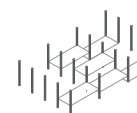


歴史の再編集

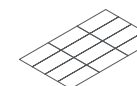
三崎河岸周辺にみられた「4間半×2間」のグリッドに柱を入れる。



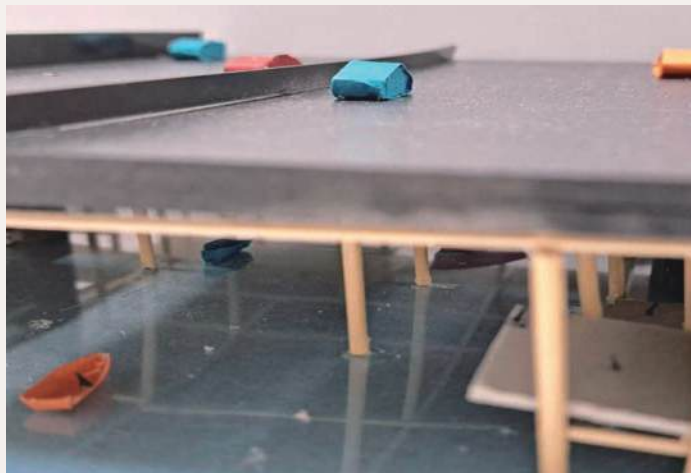
高架



床をずらす



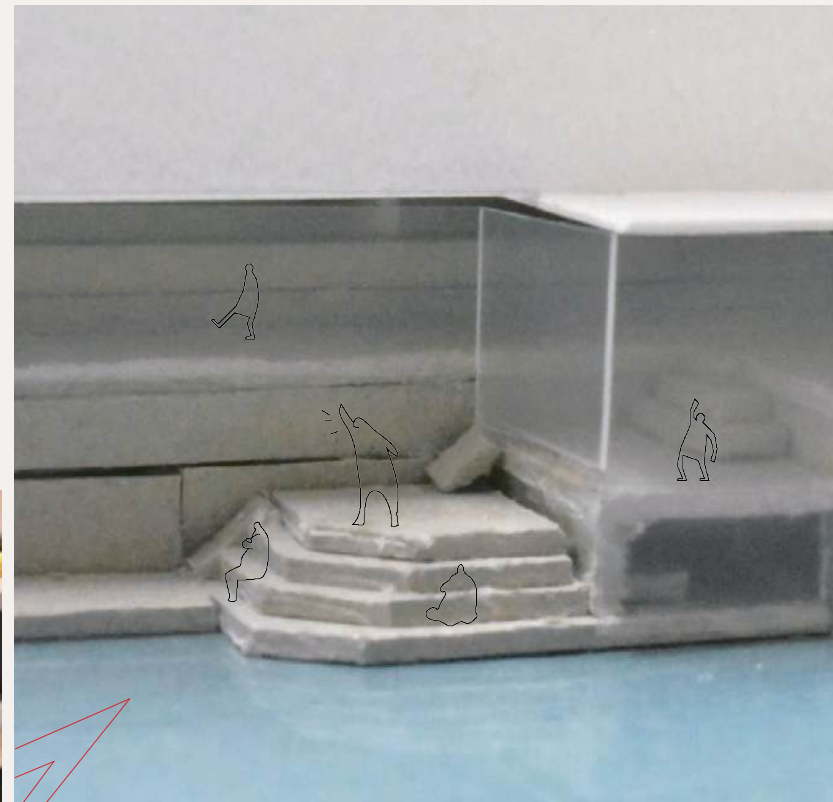
「2間×4間半」のグリッド



高速とグリッド

グリッドで川と戯れる

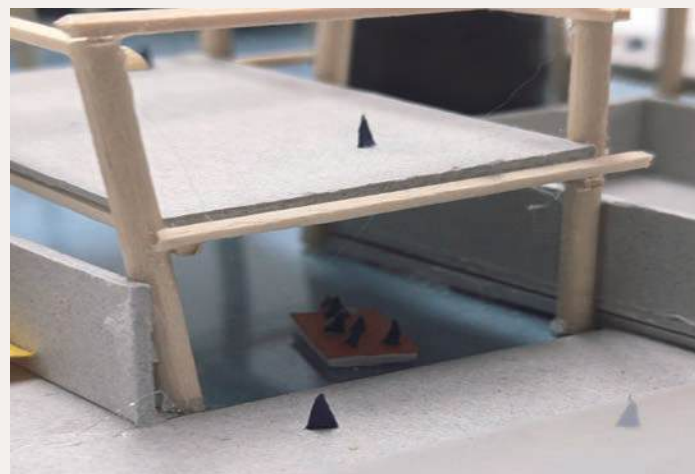
本を読む



いかだで

ショッピング

いかだで店をるお客さんたち



川と戯れる

スポーツセンター

川が入り込み、
カヌーが入れる



敷地

秋葉原を流れる神田川。この敷地の建物は川側に背を向けるように建っているため、神田川が都市の裏側へと追いやられている。



歴史 1

日本橋地域と隣接している影響から、商人や職人の長屋が連なる街であった。また、浅草門から筋違門までにわたり江戸城外堀南岸に築かれた柳原土手があった場所でもある。



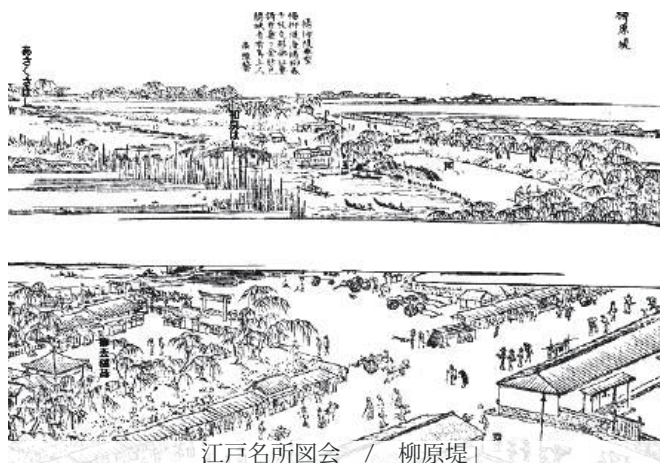
江戸切絵図「日本橋北神田浜町絵図」(1850)



現在

歴史 2

当時は土手の南側まで町屋が立ち並び、人々は土手の上を通行しており、川と密接に関わっていた。



江戸名所図会 / 柳原堤



アムステルダム国立美術館蔵

歴史 3

明治六年に土手は崩されたが、古着屋が集中し、軍服を扱う問屋ができたことから、既成服問屋街発祥の地として栄えてきた。



「神田柳原川岸通りの図」(1900)



和泉橋・江戸橋 (1930)

フィールドワーク

A

一つ一つの建物が大きく、川に対する工夫は写真の抜け道しかなく、都市の忙しいスピード感を感じた。しかし、裏側の川沿いには船着き場があり、水辺に一番近づくことができる場所でもあった。



B

JR 線に隣り合わせるように設けられている歩道橋は、忙しい仕事帰りの人通りが多く、電車・歩行者・川の流れが交差する不思議な場所だった。



C

柳森神社は地続きに水辺に近づける場所になっているようにも見た。周辺の中でもかなり自然的で時間の流れを緩やかにしていた。



D

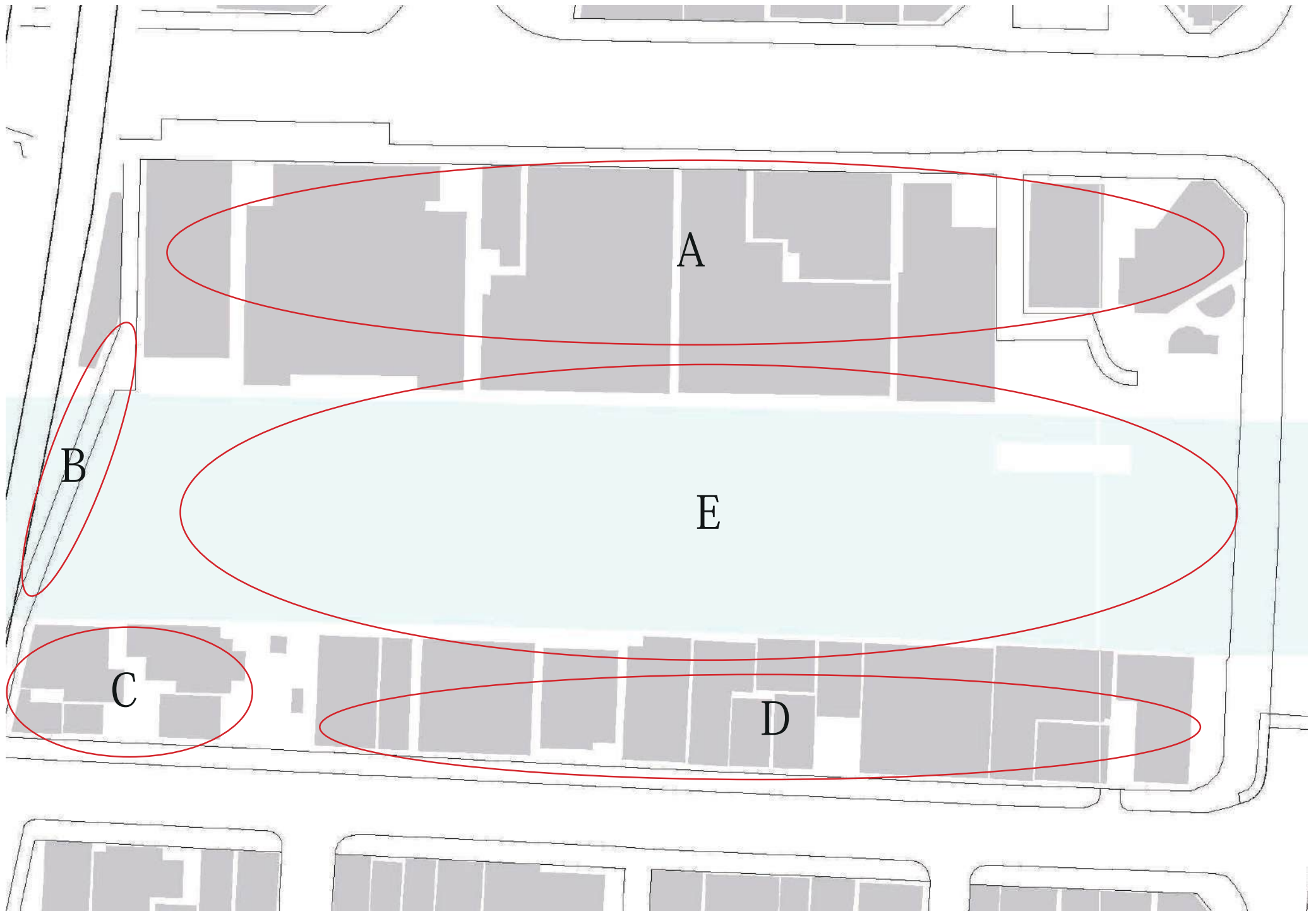
建物一つ一つのスケール感が小さくなっており、川に対して隙間空間を設けている建物が多く存在した。前面の道は柳の木と共に落ち着いた雰囲気になっていた。加えて、保育園もあり、子供の居場所になる可能性を感じた。



E

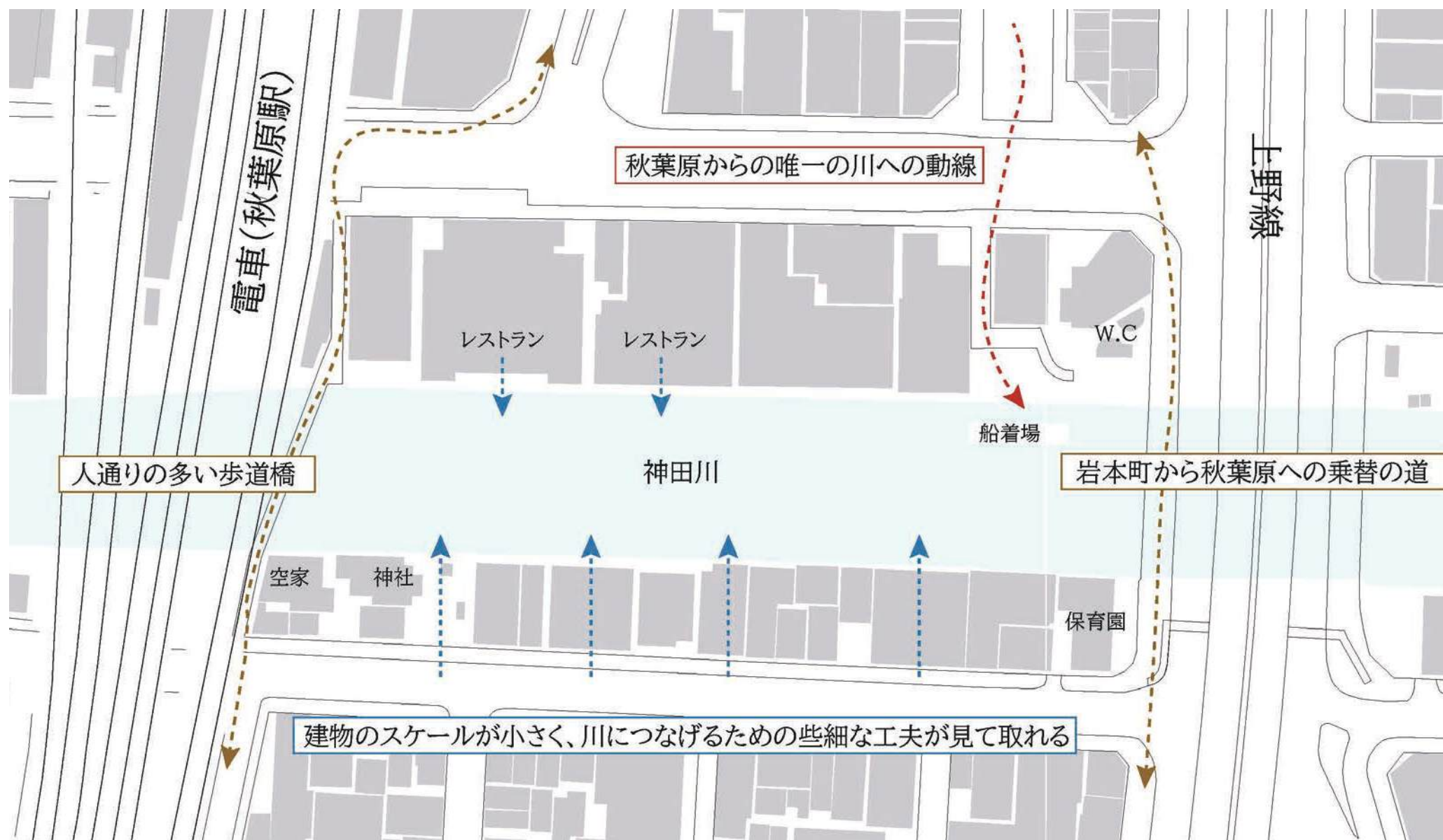
川沿いに向けて、カフェ空間を露出する建物も少しある中で、まだ川沿いが裏のように無機質なファサードを向けている建物も多く存在した。親水空間を創造することで、建物群のファサードも同時に変化すると考えられる。





敷地の特徴 1 様々な機能を持つ建築が集約している

ホテル、オフィス、神社、保育園など各建物は多種多様な用途で構成されている。



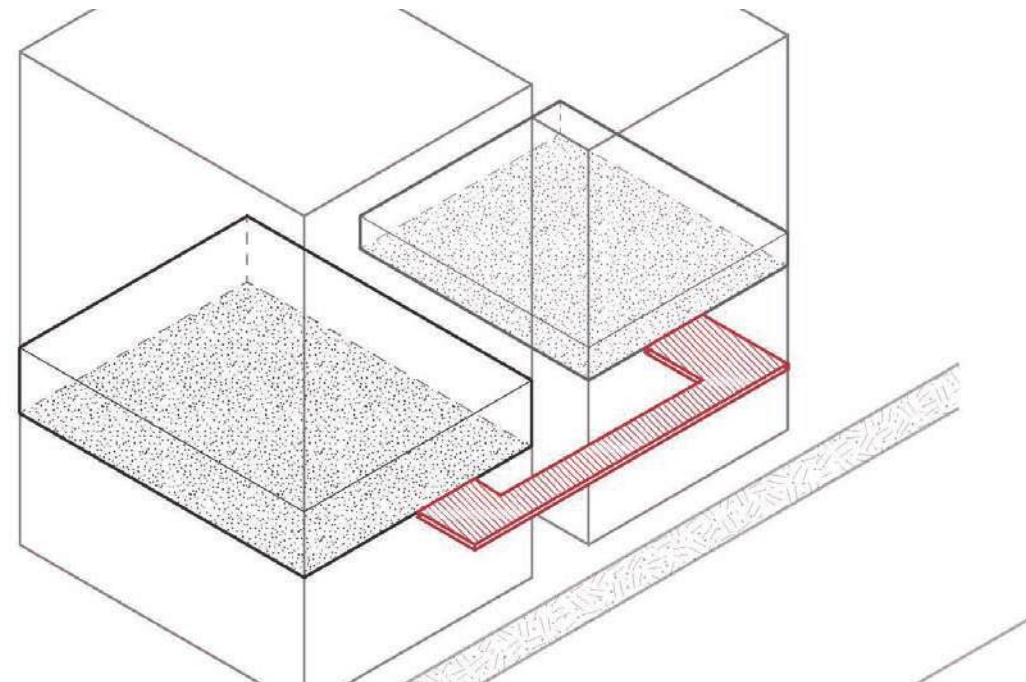
敷地の特徴 2 様々な都市の速度を体感する場

歩行者・電車・高速道路・川の流れなど都市に内在し、様々なスピードを持つ要素が多く存在する。



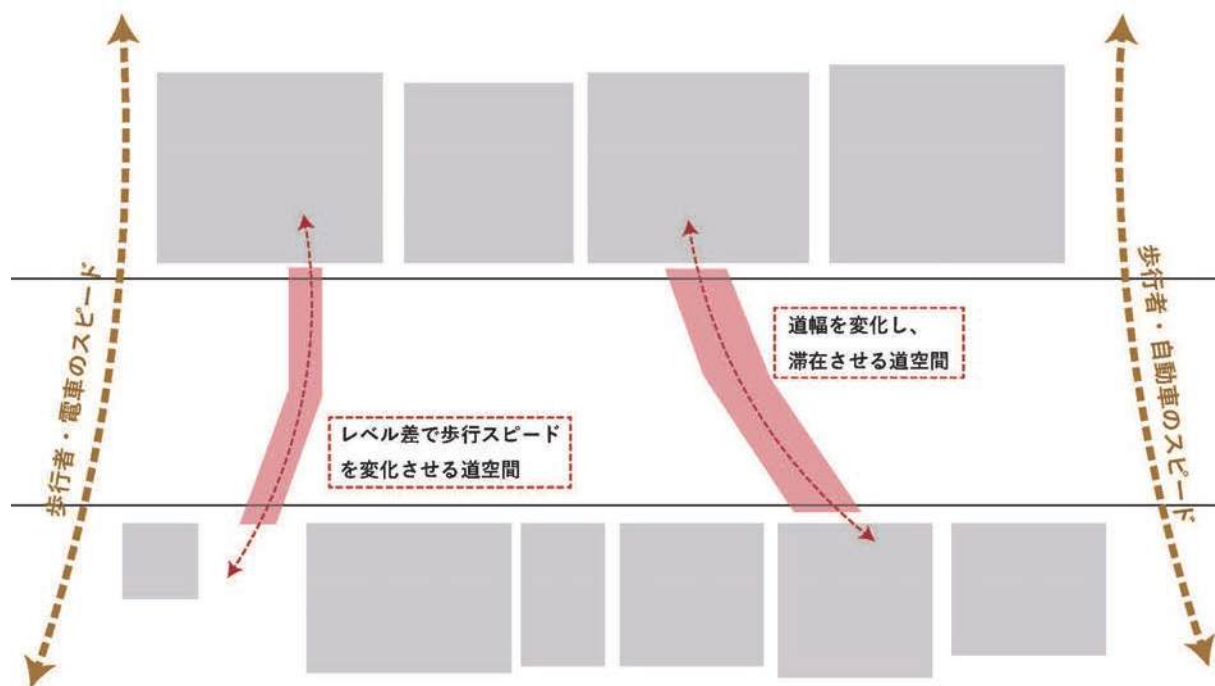
提案 1 隣り合う機能を接続する

隣の建物同士の用途をかけ合わせることで新たな活動を考える。また、それを線形につなげることで水辺にそれぞれの用途のつながりを露出させる。



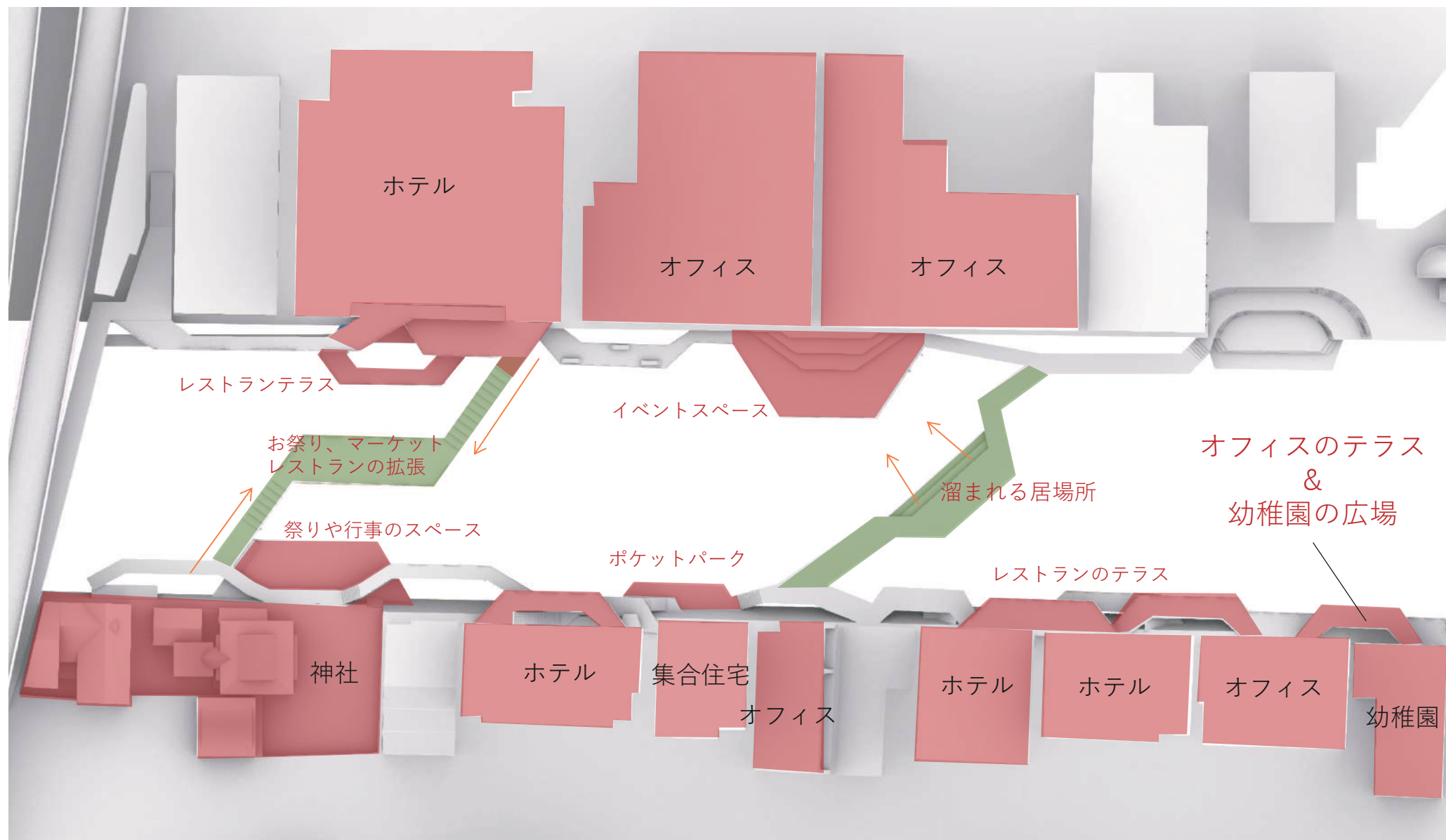
提案 2 速度の操作

様々な都市のスピード感がある場所に人の活動と共に変化する時間軸を挿入し、都市の様々な交差する速さを体感する



平面ダイアグラム 線形テラスで全体のデザインを構成

それぞれのテラスが周辺建築の機能を延長した居場所となり、且つ別の機能をもつ周辺建築との関係を築く。





それぞれの建築が持つ機能の活動が溢れだす



レストランテラスからは電車、歩行者、川の流れ等の様々な都市スピードを感じながら他での活動を眺めることができる





都心で失われた水辺周辺での居場所で子供達も遊ぶことができる